

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (4)  
— 『キエフ年代記集成』 (1149 ~ 1151 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

## 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (4) — 『キエフ年代記集成』 (1149 ~ 1151 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

(6657 [1149] 年続き)

キエフにおけるユーリイ大公 [D17] の公支配のはじまり。かれは、ウラジーミル・モノマフ [D1] の子であり、フセヴォロド [D] の孫であり、ヤロスラフ [13] の曾孫であり、ルーシの地全土を洗礼した大ウラジーミル公 [06] の玄孫である。

**[384]** ユーリイ [D17] はキエフへ馬を進めた<sup>1)</sup>。多くの民が城を出て、大いなる喜びをもって出迎えた。かれは自分の父の公座に就き、神を称賛し誉め讃えた。かれは、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] を呼び寄せるために、チェルニゴフへ使者を遣った。ウラジーミル [C34] はユーリイ [D17] のもとにやって来て、かれに拝礼した<sup>2)</sup>。

そこで、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、かれ [ウラジーミル [C34]] にこう言い始めた。「お前はわしの父の地を所有しているではないか」。こうして、かれ [スヴァトスラフ [C43]] はクルスクとセイム川流域一帯、スノフスク千人地区<sup>3)</sup> (Сновская тысяча) を [ウラジーミル [C34] から] 取り上げた<sup>4)</sup>。

---

1) タティエーシチェフによると、ユーリイのキエフ入城は、イジャスラフ [D112:I] がキエフを脱出した翌日の、1149年9月2日としている。[Тагичев III: С. 9]

2) ウラジーミル [C34] は、ユーリイ [D17] の勝利を決定づけたベレヤスラヴリ城外の合戦には加わらなかったものの、ユーリイとスヴァトスラフ [C43] の同盟要請を拒否したことから、敗者の側に立っていた。かれは、ユーリイに恭順の意を示し、新秩序を認める宣誓を行うために、キエフにやって来たのである。

3) 「スノフスク」(Сновськ) は、デスナ川右岸の支流スノヴィ (Сновь) 川の河岸に建設された城砦 (チェルニゴフから北東約 20km に位置する現在のセドニウ (Седнів) 村) で、『原初年代記』1068年の項に初めて言及されている。「スノフスク千人地区」(Сновская тысяча) は、おそらくチェルニゴフの千人長が管轄していた、スノフスク城砦を中心とする周辺支配地の、古くからの名称であろう。[Зайцев 2009: № 93]

4) ここは、テキストの切り方によって解釈が難しいが、スヴァトスラフ [C43] は、新しいキエフ公に恭順を示すためにやって来たチェルニゴフ公ウラジーミル [C34] に対して、本来は「父の地」(отчина)、すなわちオレグ [C4] の旧領だが、ウラジーミル [C34] が〈不当に〉支配している、スノフスクからクルスクに至るデスナ川=セイム川流域の諸都市の返還を求め、承知させたと解釈したい。なお、例えばクルスクは1141~1146年まで実際にスヴァトスラフ [C43] の領地だった。[『イパーチイ年代記』(3): 330頁, 注6]を参照。

また、〔スヴァトスラフ [C43] が〕 イジャスラフ [C35] から取り上げたのは、スルチェスク<sup>5)</sup>とクレチェスク<sup>6)</sup> (Кльчеськ) など、すべてのドレゴヴィチ (Дреговичъ) の地<sup>7)</sup>であった<sup>8)</sup>。

このように合意して、かれら〔ウラジーミル [C34] とスヴァトスラフ [C43]〕はそれぞれの地<sup>9)</sup>へ去った。

ユーリイ [D17] は、自分の長男のロスチスラフ [D171] をペレヤスラヴリの公に、アンドレイ [D173] をヴィシエゴロドの公に、ボリス [D170] をベルゴロドの公に、グレーブ [D178] をカーネフの公に、ヴァシリコ [D174] をスーズダリの公に、〔それぞれ息子たちを〕据えた<sup>10)</sup>。

さて、イジャスラフ [D112:I] はヴラジミル<sup>11)</sup>に到着すると、ハンガリーの自分の義弟にあたる王<sup>12)</sup>のもとに、またポーランドの自分の姻戚にあたるボレスワフ (Болеслав)、ミエシ

---

5) 「スルチェスク」(Случеск)はベラルーシの首都ミンスクから約100km南に下った地点にある都市。〔イパーチイ年代記(1):260頁,注86〕を参照。

6) 「クレチェスク」(Клеческ)は、現在のベラルーシのクレツァク(Клецк)で、スルチェスクから西へ約60kmの地点に位置している。

7) 「ドレゴヴィチ」(Дреговичи)は、本来は東スラブ族の種族名で、『原初年代記』のはじめの部分に「プリベチ川とドヴィナ川の間に住み、ドレゴヴィチと名付けられた」とある〔『原初年代記』:6頁,注136〕。この時代には地名として用いられており、その居住地であるプリピャチ(Припять)川右岸(北岸)の支流沿い一帯を指し、クレチェスクとスルチェスクもその中心城市の一つである。

8) これまでの年代記記事に、イジャスラフ [C35] がドレゴヴィチの地を領地としていたという指摘はない。この地は伝統的にモノマフ一族の支配下にあったことから〔イパーチイ年代記(1):260頁(注86);イパーチイ年代記(2):299頁(注87)〕を参照、イジャスラフ [C35] が、モノマフ一族出身のイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] (キエフ公)と同盟していた時期に、後者から所領として受け取ったものと推定できる。

これにより、イジャスラフ [C35] の所領は、スタロドゥーブ(Стародуб)の周辺だけに限定されたことになる。

9) スヴァトスラフ [C43] はノヴゴロド・セヴェルスキイへ、ウラジーミル [C34] はチェルニゴフへ帰還した。

10) ユーリイ [D17] は、年少のヴァシリコ [D174] をそれまでの支配地スーズダリに残した他は、4人の息子たちを、すべてドニエプル川沿岸の主要都市の公座に就けている。ここからも、いかに、ユーリイが、自らの一族によって南方の「ルーシの地」の支配を固めようとしていたかが分かる。

11) 当時、ヴラジミル・ヴォルィンスキイは、イジャスラフ [D112:I] の従兄弟にあたるウラジーミル・アンドレイエヴィチ [D181] が公として支配していたと考えられる。これについてタティエーシチェフは「イジャスラフ [D112:I] はヴラジミルにやって来ると、甥〔従兄弟の間違い〕のウラジーミル・アンドレイエヴィチ [D181] をプレスト(Брест)とドロギーチン(Дрогичин)へと退去させた」と説明している。〔Тагишев Т. III, 1995: C. 9〕

12) イジャスラフ [D112:I] の異母妹エフロシニヤは、1146年にハンガリー王ゲーザ二世(在位1141-1162年)と結婚しており、イジャスラフにとって王は義弟(зять)にあたる。イジャスラフは1148年にもスヴァトスラフ [C43] 等チェルニゴフ諸公と戦うために、ゲーザ二世の援軍を要請している〔『イパーチイ年代記』(3):362頁,注177〕参照)。

コ(Мажка), ヘンリック(Индрих)のもとに<sup>13)</sup>, またチェコの公である自分の姻戚ヴラチスラフ<sup>14)</sup>(Володислав)のもとに使者を遣って, 支援を要請した。

かれらは自らの部隊を連れてキエフへ進軍するために自ら馬上の人となっていた。自身が参加することができない場合には, 自分の部隊を進軍させたり, 自分の弟に行かせたり, 自分の軍司令官を行かせたりした。

[ハンガリー]王は, かれ〔イジャスラフ[D112:I]〕にこう言って約束した。「わしは皇帝と戦っている。もし, 身体が空いたら自分が行く。そうでない場合には, 自分の部隊を行かせよう<sup>15)</sup>」。ポーランドの諸公は, **[385]** かれ〔イジャスラフ[D112:I]〕にこう言った。「われらは, そなたと近い。われらは, 一人を自らの土地を守るために残し, 二人はそなたのもとに行こう」。チェコの公は, かれ〔イジャスラフ[D112:I]〕に言った。「わしは, 自分の部隊を率いて, 自ら行く用意がある」。

イジャスラフ[D112:I]は, ハンガリーの王のもとへ, ポーランドへ, チェコへと, 多くの贈物を持たせた敬意を表明する使者を, 再び派遣して, かれらにこう言った。「そなたたちがわしを助けようとしているように, 神がそなたたちを助け給わんことを。わしはそなたたちに言う。キリスト降誕祭<sup>16)</sup>が来たら馬上の人となられよ」。

こうして, キリスト降誕祭になって, 諸公は馬に乗って〔進軍を始めた〕。[ハンガリー]王は身体が空かなかったので, 1万人のハンガリー兵を派遣した。王はかれ〔イジャスラフ

---

13) 1137年に当時のノヴゴロド公フセヴォロド[D111]の娘で, イジャスラフ[D112:I]にとって姪にあたるヴェルフスラヴァが, 後にポーランド大公になる「ボレスワフ」四世(巻毛公)(Bolesław IV)に嫁いでいる([『イパーチイ年代記』(2):313頁, 注153]参照)。「ミェシコ」(三世老公)(Mieszko III Stary), サンドミエシュの「ヘンリック」(Henryk Sandomierski)はその弟たちである。ここで使われている сват の語は古代ロシア語では広く「姻戚」関係を表している。

14) ヴラチスラフ二世は1140年からチェコの公で, 1158年からはチェコ王に就く。1149年より前に, イジャスラフ[D112:I]の息子ヤロスラフ[I2]が, ヴラチスラフ二世の姉妹と結婚しており, イジャスラフにとってヴラチスラフ二世は姻戚(сват)にあたる。[Rusian genealogy]

15) 12世紀40年代には, シチリア王ロジェール二世は, ビザンティンをハンガリー及びセルビアと対抗させる政策をとり, 1141年に即位したゲーザ二世も, シチリアと協調して, ビザンティンを攻撃するようになる。1149年, ビザンティン皇帝マヌエル一世が, セルビア, ラシユカ国(ゲーザ王の母はこの出身)の王(ジュパン)の反乱を鎮圧した後に, ハンガリーとの戦争が勃発した。これが, その後のビザンティンとハンガリー間の長期の戦いにつながっている[尚樹1999:594, 599頁][オストロゴルスキー2001:494-495頁]。ゲーザ二世のイジャスラフ[D112:I]への言葉は, このようなハンガリーの対外情勢を背景にしている。

16) 1149年12月25日に相当する。

[D112:I] に言った。「そなたに、わが部隊を派遣しよう。自分もガーリチ公<sup>17)</sup>の山脈の麓まで進軍して、かれ〔ガーリチ公〕を動けなくさせよう<sup>18)</sup>。そのあいだに、そなたは、侮辱を受けた相手<sup>19)</sup>に報復せよ。もし、その部隊が疲労困憊してしまうようなことがあれば、わしは、より強い〔部隊〕をもう一度派遣しよう。あるいは、自らも乗馬して〔進軍しよう〕」。

ボレスワフは弟のヘンリックとともに自分の部隊を率いてみずから進軍し<sup>20)</sup>、ミェシコはブルス<sup>21)</sup> (прусы) 人から自分たちの地を守るために残留した。

ヴァチェスラフ [D16] は<sup>22)</sup>、このことを聞くと、ユーリイ [D17] に使者を遣って言った。「見よ、ハンガリー人が進軍してやってくる。ポーランドの諸公もすでに乗馬して〔進軍を始めた〕。イジャスラフ [D112:I] ももう戦いの準備をしている」。さらに、〔ヴァチェスラフ [D16]〕は自分の兄弟のユーリイ [D17] に対してこう言った。「イジャスラフ [D112:I] にかれが望むものを与えるか、**[386]** そうでなければ、自分の部隊を率いてわしのところに来て、わが領地<sup>23)</sup>を守れ。

17) ウラジミルコ・ヴォロダレヴィチ [A121] (ガーリチ公在位 1141-1153 年) のこと。ウラジミルコは、キエフからの独立を確保するために、キエフ公だったイジャスラフ [D112:I] に対抗していたユーリイ [D17] と、同盟を結んでいた。1149 年の末には、息子のヤロスラフ [A1211] (「八賢公」(Осмомысл)) をユーリイの娘オリガと結婚させている。また、ウラジミルコ [A121] の姉イリーナは、ビザンティン皇帝マヌエルの叔父イサキオスと結婚しており、ウラジミルコと皇帝も姻戚関係にあった。

なお、タティーシチェフによれば、イジャスラフ [D112:I] はヴラジミルの城市に着くとすぐに、このウラジミルコ [A121] のもとにも使者を遣って援軍を要請した。ウラジミルコは「イジャスラフの父親ムスチスラフ [D11] が、自分たちの一族から取り上げたウラジミルの旧領の返還を要求した。しかしイジャスラフはそれらの諸城市は平和な協定によって帰属が定められたものとして、要求を受け容れなかった。結局、イジャスラフはウラジミルコが自分に敵意を持たないことだけを求めた」[Татищев Т. III: С.9] としている。

18) カルパチア山脈の麓までハンガリー軍を進めて、ガーリチ公ウラジミルコ [A121] が、ヴラジミルヤルク方面へ進軍するのを背後から牽制するということ。

19) ユーリイ [D17] を指している。

20) これについて、15 世紀のポーランドの歴史家ヤン・ドゥウゴシュは、「その年 [1149/1150 年] の冬に二人の兄弟、マゾフシャ公のボレスワフとサンドミエシュ公ヘンリックが、自分たちの軍兵を率いてやって来た。ハンガリー人もやって来た」[Щавелева 2004: С. 167, 320] としている。

21) プルス (プロイセン) 人は、ヴィスワ川とクロニアン湖周辺に分布した異教徒のバルト・スラヴ系民族。カトリックのポーランドとしばしば対立し、ボレスワフ 4 世の時代には遠征が行われていた。

22) 以下の叙述からも分かるように、ヴァチェスラフ [D16] は、1146 年に甥のイジャスラフ [D112:I] によってトゥーロフの公座を追われてからこのときまで、ゴルニニ河畔の小さな城市ペレスプニツァ (Переспонница) の公位に就いていた ([Соловьев 1988: С. 448] 参照)。この場所からであれば、イジャスラフ [D112:I] と外国からの援軍の動きは手に取るように分かったはずである。

23) わが領地 (волость моя) は、トゥーロフと、ペレスプニツァ周辺の諸城市のことだろう。イジャスラフ [D112:I] が拠点とするルチェスクは、ペレスプニツァに近く、イジャスラフ [D112:I] 及び外国軍隊がキエフへと進撃する途上で攻められる危険性があった。

わしに対して、イジャスラフ [D112:I] はこう言ってきたのだ。『どうか、わたしの父になってください。進軍して、キエフの公座に就いてください。自分はユーリイ [D17] とともに生きることはできません。もし、わたしに愛顧を示すことをせず、キエフの公座に就くために進軍しないのなら、わたしは、あなたの領地を焼くでしょう』と。兄弟よ、今や来たれ、神がわれらになにを顕すか、善きことか、悪しきことかを、二人で同じ場所で見ようではないか<sup>24)</sup>。兄弟よ、もし来なければ、わしの領地が焼かれたとしても、惜しむことはない。

ユーリイ [D17] はこれを聞くと、自分の軍を集めて、キエフを出発した。原野のポロヴェツ人も援軍として呼び寄せ、かれらとともに進軍した。

その時<sup>25)</sup>、ヴラジミルのイジャスラフ [D112:I] のところへ、ハンガリー人 (угре) が援軍にやって来た。ポーランドの公ボレスワフも自分の弟のヘンリックと共に、大軍を引き連れて〔やって来た〕。イジャスラフ [D112:I] はかれらを食事に招いた。こうして、食事をとり、興じて、かれらを大いなる名誉をもって歓待し、多くの贈物をかれらに贈った。こうして、かれらはそれぞれ自分の荷物とともに出発した。

翌日、イジャスラフ [D112:I] はヴラジミルから出て、そこからルチェスク (Луческ) へと向かった。そこで、3日間滞在した。そこで、ボレスワフは多くの小士族たちに刀礼の儀式を行った<sup>26)</sup>。

その時、〔ヴァチェスラフ [D16] のいる〕ペレソプニツァ<sup>27)</sup> (Пересопница) にユーリイ [D17] の二人の子、ロスチスラフ [D171] とアンドレイ [D173] がやって来た。【387】 ガーリチからはウラジミルコ (Володимир)[A121] が援軍のために行軍した。ウラジミルコ [A121] 自身は、すでに出击して、シュムスク<sup>28)</sup> (Шюмьск) の近くまで来ていた。そして、ポーランド人、ハンガリー人は〔かれの到来に〕恐れおののいた。

ユーリイ [D17] は、ペレソプニツァの兄弟のヴァチェスラフ [D16] のところにやって来た。

---

24) この神判としての戦争を決意する表現については、[イパーチイ年代記(3):358頁,注154]を参照。

25) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事(6657(1149)年)では「その年の冬」(тое зимы)となっている。ハンガリー人とポーランド諸公の到着は、1150年1月頃のことと考えられる。

26) 「多くの小士族たちに刀礼の儀式を行った」(пасаше <...> сыны боярьскы мечемь многы)の表現は、いわゆる「佩剣の儀式」とも言い、カトリック世界で行われていた騎士叙任式のこと。

27) 「ペレソプニツァ」(Пересопница)は、ストゥープラ川右岸に位置する中世都市。現在はウクライナの都市リヴネ(Рівне)に近い村。

28) 現在のウクライナの都市「シュミスク」(Шумьск)に相当し、ヴラジミルコの拠点城市ガーリチからだと、北東約150kmに位置している。ここから北西へ40kmほど進むと「ドゥブノ」(Дубно)に着き、さらに同じ方向に45kmほど進むと「ルチェスク(ルツク)」(Луцк)に到着する。

イジャスラフ [D112:I]のもとに報告がもたらされた。ユーリイ [D17]が自分の兄弟のヴァチェスラフ [D16]のところ〔ペレスブニツァ〕に来たというのである。イジャスラフ [D112:I]は、このことを、ハンガリー人、ボレスワフ、その弟のヘンリックに知らせた。そして、かれらは自らの部隊とともにルチェスクを出立した。行軍して、チェメリン<sup>29)</sup> (Чемерин)のオリカ川 (Олыка)で陣を張った。

その時、ボレスワフとその弟ヘンリックのもとに、兄弟のメシコから報告がもたらされた。プルス人がかれらのもとに攻めてくるというのである。ボレスワフとヘンリックはそのことをイジャスラフ [D112:I]に告げた。このことは、イジャスラフ [D112:I]には、とても気に入らなかった。かれは、ボレスワフ、ヘンリック、ハンガリー人等と協議して、配下の家臣を〔ペレスブニツァにいる〕ヴァチェスラフ [D16]とユーリイ [D17]のもとに使者として派遣することにした。

ハンガリー人も王のもとから家臣を〔派遣した〕。使者は次のように言った。「あなたたち〔二人は〕われらにとって父にあたる方です。ところが、あなたたちは今、自分の兄弟にして息子であるイジャスラフ [D112:I]と、戦う準備をしているのです。われらは皆、神において、キリスト教徒ではありませんか。みな兄弟ではありませんか。われらはみなが仲間として一体になるべきなのです。われらはあなたたちとの間でそのことを望んでいるのです。どうか、神によって、あなたたちと、その兄弟にして息子であるイジャスラフ [D112:I]が和解しますように。あなたたち二人が、キエフ〔の公座〕に就きますように。あなたたち二人のうち、誰が〔公座に〕就くべきかは、あなたがたが知っているはずです。他方、イジャスラフ [D112:I]には、かれのヴラジミルか、かれのルチェスクがあります。【388】かれ〔イジャスラフ〕の城市であるところに、どうかをかれを〔公として〕座させて下さい。あちらの大ノヴゴロドについては、ユーリイ [D17]が、かれら〔ノヴゴロド人〕への貢税〔の徴税権〕をすべて〔イジャスラフへ〕返還するようにして下さい<sup>30)</sup>」。

29) 「チェメリン」(Чемерин)はルツクから東へ30kmほどに位置する小村でオリカ(Олыка)川が流れていた。なお、ゴラーニンは「オリカ」をドゥブノ郊外の森などの名前としている。[Goranin 1995: p.83, n.563]

30) ヤーニンによれば、1117年にフセヴォロド [D111]がノヴゴロドの公位に就いたときに、キエフ公だった父のムスチスラフ [D11]はかれに、ノヴゴロドの一部の地からの貢税収入を一族の世襲的権利として定めた。ところが、1141～1142年にユーリイ [D17]が息子のロスチスラフ [D171]をノヴゴロド公に据えたときに、その権利をユーリー一族が奪い取り、その後ムスチスラフ一族の諸公(スヴァトボルク [D114], ヤロスラフ [I2])がノヴゴロド公となっても、この徴税権は引き渡さなかった。イジャスラフ [D112:I]はこの権利をユーリイ [D17]に要求したのである [Янин 2013: С. 63]。実際、『ノヴゴロド第一年代記』の1149年の項には、ユーリイ [D17]が配下のイワン・ベルラドニク公 [A1221]をノヴゴロドに派遣して、在地の徴税吏を襲撃させるなど、徴税権をめぐる争いが起きている。[ノヴゴロド第一年代記 [I]:48頁]



ヴァチエスラフ [D16] とユーリイ [D17] は、次のように〔答えて〕言った。「われらの女婚<sup>31)</sup> ボレスワフ、われらの息子ヘンリックに神の助けがありますように。あなたたちは、われらの間に善きことがあるよう望んでいる。しかし、あなたたちが、われらに和解するよう命ずるのならば、われらの地に来て、留まらないでほしい。われらの財産を、われらの村を滅ぼさないでほしい。イジャスラフ [D112:I] については、自分のヴラジミルへ行かせよう。あなたがたも自分の地に戻ってほしい。われらは、自分たちの兄弟であり息子でもあるイジャスラフ [D112:I] と、自分たちで話を付けるつもりである」。

イジャスラフ [D112:I]、ボレスワフ、ヘンリック、ハンガリー人たちはこれを聞くと、それぞれ帰路についた。〔すなわち〕、イジャスラフ [D112:I] はヴラジミルへ、ハンガリー人たちはハンガリーへ、ポーランド人はポーランドへ行ったのである。

こうして、ヴァチエスラフ [D16] とユーリイ [D17] とイジャスラフ [D112:I] は和議を始めた<sup>32)</sup>。先に言ったように、使者を交換したのである。イジャスラフ [D112:I] は、これまでどおり、ノヴゴロドに対するすべての貢税〔の権利〕を〔ユーリイ [D17] が返還することを〕望んだ。しかし、これについては合意しなかった。ユーリイ [D17] がかれの言うことを聞かなかったのである<sup>33)</sup>。〔ユーリイ [D17] は〕、ユーリイ・ヤロスラヴィチ<sup>34)</sup> [B321] の進言を容れて、貢税〔の徴税権〕を返還しなかったのである。他方、イジャスラフ [D112:I] もこの点については譲らなかった。

このようにユーリイ [D17] が振る舞ったために、ポーランド人とハンガリー人もまた戻ってくる雲行きになった。そこで〔ユーリイ [D17] は〕言った。「イジャスラフ [D112:I] を追いだして、かれの領地をみな没収してしまおう」。

ユーリイ公 [D17] は兄弟のヴァチエスラフ [D16] 及びすべての自分の子供たちとともに、

---

31) ボレスワフ四世(巻毛公)が、ユーリイ [D17] やヴァチエスラフ [D16] にとって女婚(зять)と呼ばれているのは、ボレスワフの妻ヴェルフスラヴァが、かれらの甥フセヴォロド [D111] の娘であることからくる、広い意味での姻戚名称である。

32) このとき、イジャスラフ [D112:I] は、ヴァチエスラフ [D16] がキエフの公位に就くことを主張したと考えられる。本稿注 99 を参照。

33) タティーシチェフによれば、この交渉においてヴァチエスラフ [D16] は、ユーリイ [D17] にイジャスラフ [D112:I] との和解を熱心に勧めたが、適わなかったとしている。〔Тагищев III: С. 12〕

34) 1144年の項に、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は、当時のキエフ公フセヴォロド [C41] によって、フセヴォロドコ [F11] の娘と結婚させられたとの記事がある〔『イパーチイ年代記(2): 333頁、注279〕参照。当時、フセヴォロドの息子スヴァトスラフ [C411:G] の庇護を受けていたとすれば、この時にスヴァトスラフの盟友であるユーリイ [D17] のもとにいたことも納得できる。また、城市ヴラジミルは、かつてはユーリイ [B321] の父ヤロスラフ [B32] の旧領(1110-1117年)、つまりかれにとって「父の地」(отчина)であった経緯を考えると、ユーリイ [B321] は旧領の回復を狙っていたのかもしれない。



**【389】** ルチェスク (Лючьск) へ向かって進軍した。ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] は、自分の弟アンドレイ [D173] とともに先頭を進んだ。ポロヴェツ人も一緒だった。かれらが、ムラヴィツァ (Муравица) で陣を張ったとき、夜半に悪意による脅かしの騒ぎがあり、そのためポロヴェツ人は、自分たちの軍司令官ともども全員がもと来たところへ逃げてしまった。アンドレイ [D173] が先頭について、兄のロスチスラフがその後に陣を布いていた。〔ロスチスラフは〕合図して呼び招いたが、アンドレイはかれに従わず、しかし、この騒ぎには耐えた〔逃げ出さなかった〕。アンドレイの従士たちはかれのところに来て、次のように文句を言った。「公よ、何をしていますのですか。乗馬〔進軍〕して行動を起こすのです、公よ。さもないと、辱めを受けることになりますぞ」。

アンドレイはかれら〔従士たち〕の言うことを聞かず、神に望みをかけて、明るくなるのをじっと待った。そして、アンドレイはポロヴェツ人が夜明けまでにみな逃げ出してしまったのを見て、かれを救った神を讃美した。そして、自分の兄〔ロスチスラフ [D171]〕とポロヴェツ諸侯のところに行った。そして、かれらは合流して、協議して、軍を引き上げさせて、ドブノ<sup>35)</sup> (Добно) で陣を張った。

かれらは父〔ユーレイ [D17]〕からの援軍を待っていると、そこに報告がもたらされた。ユーレイ公 [D17] がその兄ヴァチェスラフ [D16] とともにやって来るというのである。そこで、かれらはルチェスクに進軍を始めた。かれらは、ルチェスクに二手に分かれて向かった。

そのとき、ルチェスクには、イジャスラフ [D112:1] の弟ヴラジーミル [D115] がいた。

そしてかれら〔ロスチスラフ [D171] とアンドレイ [D173]〕が〔ルチェスクの〕城市に近づいて、自分たちの父〔ユーレイ [D17]〕の軍旗を認めた。また、城内から歩兵が出てくるのが見え、かれらとの間で射撃が交わされた。

ロスチスラフ [D171]、ボリス [D170]、ムスチスラフ [D17j] は (…)<sup>36)</sup> **【390】** これは、かれ〔アンドレイ [D173]〕は戦闘の仕方において思いあがることはなく、神からの称賛だけを求めていたことによっている。〔アンドレイは〕このような神の助けと十字架の力と自らの祖父の祈

35) 「ドブノ」(Добно) は「ドゥベン」(Дубен) とも言い、ルチェスク (ルツク) からは南に 45km ほどに位置する城砦で、イクヴァ川＝ストルィ川を経てルチェスクに達することができた。

36) この部分は『イパーチイ年代記』のすべての写本において欠失している。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事や文脈から判断して、ここは明らかにテキストが欠落しているため、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の該当箇所から、次の部分を補うことができる。「自分の兄弟アンドレイ [D173] が歩兵に向かって襲撃を仕掛けようと意図していることを知らなかった。なぜなら、かれ〔アンドレイ〕の軍旗が掲げられていなかったからである」。

り<sup>37)</sup>によって、誰よりも先に敵に向かって馬で突撃した。かれの従士たちもそのあとから馬を進めた。アンドレイ [D173] は自分の敵手〔との戦闘〕で槍を折った。

歩兵たちは壕づたいに城市に向かって逃げていき、〔アンドレイは〕自らかれらを追った。従士たちはかれについて行くことができず、ただ、二人の年少の下級従士だけが、自分の公が大きな危険に陥ったことを認めた。なぜなら、かれ〔アンドレイ〕は敵兵たちに取り囲まれたからである。二人〔の下級従士〕はかれ〔アンドレイ〕のあとを追った。〔アンドレイの〕乗った馬は二本の槍で傷を負わされ、三本目の槍は鞍の前輪の部分にあたった。城内からは、かれ〔アンドレイ〕に向かって、雨のように投石が降り注いだ。

ひとりのドイツ人がかれ〔アンドレイ〕を認めて、長刀<sup>38)</sup>で突き刺そうとしたが、神は何度もかれを守った。なぜなら、神はその愛する者たちを危険に遭わせたとしても、その慈愛によってかならず救い出すからである<sup>39)</sup>。

アンドレイ公 [D173] はおのれの心の中で思慮して、こう言った。「これは、イジャスラフ・ヤロスラヴィチ [B] のような死<sup>40)</sup>を〔神が〕わたしにお望みなのだろうか」。そして、かれは神に祈り、自分の長剣を引き抜くと、殉教者聖テオドロス<sup>41)</sup> (Феодор) の名を呼んで助けを求めた。かれの信仰ゆえに、神と聖テオドロスは、かれを無傷で救い出した。この日は聖テオドロスの記念日<sup>42)</sup> だった。このとき、下級従士のひとは殺された。

かれ〔アンドレイ〕の父ユーリーイ [D17]、かれの伯父ヴァチェスラフ [D16]、かれの兄弟たちは、アンドレイ [D173] が生きているのを見てみな喜んだ。父の家臣たちは、かれ〔アンドレイ〕を大いに称賛した。なぜなら、**[391]** かれはそこにいた誰よりも、雄々しかったからで

---

37) これは、具体的にウラジーミル・モノマフ [D1] を指していると理解してよいだろう。モノマフ公 [D1] の祈り (молитва) が、子孫の戦いにおいて「靈験」があることについては、1123年のアンドレイ [D18] のヴラジミル防衛戦、1126年のヤロポルク [D15] のポロヴェツとの戦いの記述の中にも見ることができる。

38) 「長刀」の原語は рогаина で、槍穂が太くて長く、両側に刃がついた大型の槍のこと。

39) 福音書の「主の祈り」の句 (『マタイ福音書』6:13) をパラフレーズしたもの。

40) 『イパーチ年代記』のすべての写本は Ярослав(вля)а смерть Изяславича すなわち、「ヤロスラフ・イジャスラヴィチの死」と書かれている。しかし、この個所は、1078年にキエフ公イジャスラフ [B] が、ネジャタ原の戦いで敵の歩兵に取り囲まれて立ち往生しているところを、槍で肩を突かれて殺された故事がふまえられていることは明らかであり [ロシア原初年代記:223頁]、カラムジン以来 [Карамзин 1991: C. 251 прим. 324]、ここは「イジャスラフ・ヤロスラヴィチ」と読むことが定説となっている。

41) 「殉教者聖テオドロス」に相当する聖人は二人おり、「新兵 (ティロン)」と呼ばれる、4世紀初め頃の小アジアの軍人聖人と、「將軍 (ストラティラトス)」と呼ばれる9世紀以降に尊崇が発展した軍人聖人である。ここではどちらかは定めがたいが、ゴラーニン は後者をとっている。[Goranin 1995: p. 85, n. 573]。

42) 聖テオドロスの記念日は「新兵 (ティロン)」であれ、「將軍 (ストラティラトス)」であれ、1150年2月8日ということになる。

ある。

かれの馬はひどく傷を負っており、主人を降ろすと、死んでしまった。アンドレイ公 [D173] は自分の馬を惜しみ、ストイリ川 (Стырь) の上〔の丘〕にこれを埋葬するよう命じた。

かれら〔ユーレイ側の諸公〕は城市のまわりを取り囲んで、3週間のあいだ〔敵に〕水を汲ませなかった。かれらのルチェスク包囲は、全部で6週間に及んだ。

イジャスラフ [D112:I] の弟ウラジミル [D115] は、城内で自分の家来たちとともに衰弱していた。

さて、イジャスラフ [D112:I] は、部隊を武装させてウラジミルから出陣すると、ヴァチェスラフ [D16] とユーレイ [D17] に対して、軍隊をもって戦うべく、ルチェスクへと向かった。

その時、ウラジミルコ (Володимерь)[A121] は、自分の部隊を率いてガーリチを出発した。そして、ウラジミルとルチェスクの間にあるポロナヤ<sup>43)</sup> (Полоная) 川で布陣して、そこで〔両者の軍勢を〕引き離した。この善良なウラジミルコ [A121] 公は、兄弟愛に輝き、平和を愛することを誇っており、誰に対しても悪を望まなかったのである。そのために、かれらの間に陣を張って、双方の話をまとめて〔和解させようと〕つとめたのだった。それによって、イジャスラフ [D112:I] が、ヴァチェスラフ [D16] とユーレイ [D17] を討たないように、また、かれら〔ヴァチェスラフとユーレイ〕の部隊が戦わないようにしたのである。

イジャスラフ [D112:I] は、ユーレイ [D17] の姻戚〔娘の舅〕であるガーリチのウラジミルコ [A121] に使者を遣って、次のように言った。「どうか、わしの叔父でありそなたの姻戚〔嫁の父〕であるユーレイ [D17] と和議ができるよう、とりなしてほしい。わしは、神の前であっても、かれ〔ユーレイ〕の前であっても、罪があるのだから」。ウラジミルコ [A121] は、イジャスラフ [D112:I] について、〔ユーレイに対して〕懇願をした。ユーレイ [D17] の息子ロスチスラフ [D171] とユーレイ・ヤロスラヴィチ [B321] の二人は、和を結ぶことに反対した。

再び、イジャスラフ [D112:I] は和議を願い出た。

神は、アンドレイ [D173] に **[392]**、一族のため、とりわけキリスト教徒のために祈願する心と呼び起こした。そこで、〔アンドレイは〕父〔ユーレイ〕に、次のように祈願して言った。「どうか、ユーレイ・ヤロスラヴィチ [B321] の言うことは聞かないでください。甥〔イジャスラフ [D112:I]〕と和解して下さい。自分たちの父の地を滅ぼさないで下さい。『平和は（戦いまで、

---

43) 「ポロナヤ川」(Полоная) は、チェルノグスカ (р. Черногузка) 川の支流、現在のポロンカ (р. Полонка) 川にあたり、その河口からは、ルチェスクまで北東に約 16km、ウラジミルまでは西北西に約 60km に位置している。両都の中間点ではあるが、かなりルチェスクに近い。

戦いは平和まで)』と言うではありませんか)<sup>44)</sup>。

それから、[アンドレイは]かれ[ユーリイ]に言った。「主なる父よ。『兄弟睦ましくあれば、善なるかな、美なるかな<sup>45)</sup>』という聖書の言葉を思い出して下さい」。

ガーリチの公ウラジミルコ [A121] は、ヴァチェスラフ [D16]、ユーリイ [D17]、イジャスラフ [D112:I] に、何度も使者を派遣して、かれらを和解させようとした。かれ [ウラジミルコ] はヴァチェスラフ [D16] とユーリイ [D17] に [使者を通じて] こう言った。「神は、悪人には報復を行い、敬虔な者には徳を施す権能を、われわれにお与えになったのです。われらの創造者に対して、[われらは]『われらが父よ、われらが人を赦すがごとく、われらの罪を赦し給え<sup>46)</sup>』と祈っているのではないですか。そなたたち二人の甥であるイジャスラフ<sup>47)</sup> [D112:I] は、そなたたちの血を分けた者として、そなたたちの前で非を認め、拝礼して、そなたたちに慈悲を乞うているのです。わたしは、単なる [使い] ではなく、あなたがたを単にとりなしているのでもありません。われらの時代に、神は御使いを送ることなく、預言者もないからなのです」。

ヴァチェスラフ公 [D16] はこれを聞いて、和議に心が傾いた。それは、「恭順な者は幸いである。その者たちは神の子と呼ばれるから、幸いである<sup>48)</sup>」と言われているからであった。[ウラジミルコ [A121] は言った]「(…) <sup>49)</sup> どうかルーシの地が実りに満ちて、諸公の兄弟愛が栄えますように」。

ヴァチェスラフ [D16] **【393】** 公は、自分の兄弟で姻戚のウラジミルコ [A121] の言うことを聞いて、かれの言葉を心におさめ、協議と講和へと気持ちを向けた。なぜなら、ヴァチェスラフ [D16] は、心に悪意を抱かず、いとも栄えある神を讃美する人だったからである。かれは、讃美するときには次の言葉を思い浮かべていた。「もしお前たちに、カラシ種一粒ほどの信仰があるなら、山に向かって『ここから移れ』と言えば、その通りになる<sup>50)</sup>」。また、次の言葉も思い浮かべていた。「神を愛して、同時に兄弟を憎むのは嘘である。もし、神を愛するなら、

---

44) この個所は、イパーチイ写本で約4行分の欠落がある。カッコ内は文脈を考慮して補ったもので、和議の重要さを述べた一種の格言として年代記に用いられている ([イパーチイ年代記(3):365頁、注18頁]も参照)。

45) 『詩篇』132:1 (邦訳133:1)からの引用。

46) 前注と同じく、『主の祈り』からの一節。

47) 原文ではすべての写本について「スヴァトスラフ」(Святославъ)となっているが、文脈から見て、これは明らかに「イジャスラフ」(Изяславъ)の間違いである。訂正して訳出した。

48) いわゆる山上の垂訓(『マタイ福音書』5:9など)の一節のパラフレーズ。

49) この個所にも、『イパーチイ年代記』のすべての写本で、約4行分(イパーチイ写本)の欠落がある。

50) 新約『マタイ福音書』(17:20)のほぼ忠実な引用。

おのれの兄弟を愛しなさい<sup>51)</sup>」。

ヴァチェスラフ [D16] は、自分の兄弟ユーリイ [D17] にこう言い始めた。「兄弟よ、和解せよ。そなたは、〔イジャスラフ [D112:I] と〕同意して、ここから立ち去る<sup>52)</sup> つもりはないか。ここから去れ。さもないと、イジャスラフ [D112:I] はわしの領地<sup>53)</sup> を焼き払うだろう」。ユーリイ [D17] はこれを聞いて同意した。

イジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] にキエフを引き渡した。他方、ユーリイ [D17] は、ノヴゴロドのすべての貢税〔の徴税権〕を返還した。これは、イジャスラフ [D112:I] が求めてきたものだった<sup>54)</sup>。

こうして、かれらは合意に達し、それぞれの場所に戻って行った。かれらは<sup>55)</sup> 十字架に接吻し〔合意遵守を誓〕った。春が来たとき<sup>56)</sup>、かれらは和を結ぶと、<sup>57)</sup>ペレソプニツァへと戻った。

イジャスラフ [D112:I] は、この十字架接吻を喜んだ。かれは、ペレソプニツァの父方の叔父たち〔ヴァチェスラフとユーリイ〕のところにやって来て、一堂に会して、すべてについて合意した。そして〔合意内容を守ることを〕十字架接吻で誓った。すなわち、ペレヤスラヴリでの戦いにおいて何かが掠奪され、それが家畜や奴隷である場合、各人が自分の所有物と認めるならば、それを現物で取り戻すことが出来ることを合意した。

イジャスラフ [D112:I] は、失った自分の資産を〔取り戻す〕ために、自分の家臣、自分の家令を〔ユーリイのもとに〕派遣した<sup>58)</sup>。かれの家臣たちもまた、自分の財産〔を取り戻すために〕、ある者は自ら出かけ、ある者は自分の家令を派遣した。**[394]** このようにして、かれらはユーリイ [D17] のもとにやって来て、おのれの所有物を確認し始めた。

ユーリイ [D17] は、これらをすべて正しく行わなかった。イジャスラフ [D112:I] の家臣たちは、自分の所有物を何も回復できないまま、イジャスラフ [D112:I] のもとに戻って来た。イジャスラフ [D112:I] は、自分の家臣たちを、ヴァチェスラフ [D16] とユーリイ [D17] のところに派遣し、

51) 新約『ヨハネ第一の手紙』(4:20)の文言をパラフレーズしたもの。

52) ルチェスクの包囲を解いて、息子たちとともにキエフ方面へと引き返すこと。

53) このときヴァチェスラフ [D16] が拠点置いていたペレソプニツァとその周辺を指すと考えられる。

54) ノヴゴロドの徴税権については、前注 30 を参照。

55) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「お互いに使者を遣り取りして」という文言が加わっている。

56) 1150年の3月後半くらいを指している。

57) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ヴァチェスラフの領地である」の文言が加わっている。

58) この時点では、ユーリイ [D17] はキエフへ、その子供たち(グレーブ [D178]を除く)もドニエプル沿岸の所領地へと戻ったと考えられる。

抗議してこう言った。「兄弟よ、われらは、自分の所有物を確認したらそれを受け取ることを、十字架接吻し〔て誓う〕たのではなかったのか。兄弟よ、今となっては、もし、そなたが十字架〔接吻〕を正しく守るのなら、神はわれらを生き延びさせてくれるだろう。もし正しく守らないなら、どうなるか見守ろうではないか」。

6658 [1150] 年

ユーリイ [D17] は、自分の娘<sup>59)</sup>をオレーグ・スヴァトスラヴィチ<sup>60)</sup> [C431] に、別の娘<sup>61)</sup>をガーリチのウラジミルコ [A121] の息子であるヤロスラフ [A1211] に嫁がせた<sup>62)</sup>。

そのとき、ユーリイ公 [D17] は、ヴァチェスラフ [D16] をキエフの公座に就かせるべく呼び寄せた<sup>63)</sup>。貴族たちは、ユーリイ [D17] に翻意を促して、こう言った。「あなたの兄〔ヴァチェスラフ〕はキエフを持ちこたえられなくなります。〔もしそうなれば〕キエフはあなたのものにも、他の者<sup>64)</sup>のものにもならないでしょう」。ユーリイ [D17] は貴族たちの言葉を聞いて、ヴィシエゴロドから自分の息子アンドレイ [D173] を退去させて、ヴィシエゴロドをヴァチェスラ

---

59) ヴォイトヴィチによれば、この娘はエレナ(Елена)としているが [Войтович 2006: С. 548]、この名の出典については不明。

60) オレーグ [C431] については、生年不明。当時かれの父親スヴァトスラフ [C43] は、キエフ公になったユーリイ [D17] の同盟者としてノヴゴロド＝セヴェルスキイを拠点としていた。息子オレーグ [C431] もこの城市にいた可能性が高い。

61) ヴォイトヴィチによれば、この娘がオリガ(Ольга)としている [Войтович 2006: С. 547]。オリガについては、『イパーチ年代記』1181年の項に「フセヴォロド [D177:K] の姉妹のオリガが逝去し(…)ヴラジミル〔・ザレスキイ〕の聖母教会に埋葬された」とある。かの女とヤロスラフ [A1211] の結婚は1160年代の中頃に破綻し、その後、ポーランドやガーリチ地方を点々としたのちに、父の根拠地スズダリ地方にたどり着いて没したとされている。ただし、このオリガが、ノヴゴロド＝セヴェルスキイのオレーグ [C431] に嫁いだ方の娘である可能性も否定できない。

62) ヤロスラフ [A1211] の父ウラジミルコ [A121] は自領ガーリチの独立をめぐってイジャスラフ [D112:I] と敵対関係にあり、共通の敵を持つことからユーリイ [D17] と同盟関係を結んだ。この結婚はその同盟の確約するものであろう。

63) これは、1150年春(注56参照)に行われた和議の内容がここで述べられているのではないだろうか。すなわち、交渉でイジャスラフは、ヴァチェスラフがキエフの公座に就くことを主張し、一時はユーリイもその意向を持っていたが、自分の貴族の反対にあって、結局、自分がキエフの公座に就くことになったという経緯である。後注82を参照。

64) 『ラヴレンチイ年代記』並行記事では「かれのものにもならない(ни тому)となっており、ここも、ヴァチェスラフ [D16] のことを指していると考えられる。ここでのユーリイの貴族(上級従士)たちの進言の主旨は、軍勢力も人脈(同盟者)もないヴァチェスラフにキエフの公座を委ねたりすれば、たちまちキエフ人が反乱を起こして、ヴァチェスラフどころかユーリイ自身も公座を確保することが危うくなる、ということ。



フ [D16] に与えた<sup>65)</sup>。

その時、イジャスラフ [D112:I] は、ヴァチェスラフ [D16] とユーリイ [D17] のもとに使者を遣って、こう言った。「わが二人の兄弟たちよ、そなたたち二人は十字架接吻をして、わしの所有物であるものは回復すると〔誓った〕ではないか。兄弟たちよ、だから最初、わしは〔回復のための〕使者を派遣したのだ。今、十字架接吻して〔誓った〕ことを、正しく行うならばそれでよい。もし、それらをすべて回復しようとしなければ、わしは侮辱を受けたまま<sup>66)</sup> であることはできない」。

その時、ヴァチェスラフ [D16] はヴィシェゴロド〔の公座〕に座していた。他方、ユーリイ [D17] はキエフに、ユーリイ [D17] の息子グレーブ [D178] はペレソプニツァと【395】ドロゴブーヅに座していた<sup>67)</sup>。イジャスラフ [D112:I] は、先に言ったように「侮辱を受けたままであることはできず」、十字架接吻を正しく実行しようとした。(…)<sup>68)</sup>

〔イジャスラフ [D112:I] は〕やって来ると<sup>69)</sup>、ルチェスクに立ち寄った。そして、翌日には、ルチェスクからペレソプニツァへ軍を進めた。そこで、〔グレーブ [D178] の〕この城市に襲撃を仕掛けた。

その時、グレーブ [D178] は、ペレソプニツァ城市の上流に軍営を置いており、輜重車はストゥブラ (Стубла) 川<sup>70)</sup> に配置していた。そこから、グレーブ [D178] 自身はやっとのことで城内へ逃げ込んだ。しかし、輜重車は奪われ、かれの従士たちは捕虜となり、かれの馬匹も捕獲された。かれの別の従士たちも捕まり、城市から連れ去れた。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕に対抗して〔ともに戦う〕手勢はいなくなってしまった。

そこで、グレーブ [D178] は城内から軍使をイジャスラフ [D112:I] のもとに遣って、こう言った。「ユーリイ [D17] がわたしにとって父であると同様に、あなたはわたしにとって父です。

65) このユーリイの措置がヴァチェスラフの不満を買ったことについては、以下の注 243 を参照。

66) 「侮辱を受けたまま」(въ обидѣ... быти) とは、所有物の損害をこうむった状態をそのままにしておくこと。

67) ペレソプニツァにはヴァチェスラフが座していたが、ヴァチェスラフがヴィシェゴロドに移動したのに伴って、グレーブ [D178] が領有することになった。かれはユーリイ [D17] がイジャスラフ [D112:I] から前年にキエフを奪った際にはカーネフ公に任じられていた。カーネフがそのほかの兄弟たちが得たキエフ近郊の所領(ヴィシェゴロド、ベルゴロド)に較べて重要性が低いことから、グレーブ [D178] がペレソプニツァに派遣されたのだろう。

68) この部分には、イパーチイ写本で 4 行分の欠落がある。異読のフレーブニコフ写本では、さらに 1 行分の欠落がある。

69) この時点の拠点地であるヴラジミルから軍を率いて進軍して来た、ということ。

70) 「ストゥブラ川」(Стубла) は、ゴリニ(ホルイニ)川左岸の支流で、ペレソプニツァ近くを流れている。



わたしは、あなたに拝礼します。どうか、わたしの父と話し合ってください、また、わたしを父のもとに行かせて下さい<sup>71)</sup>。わたしを捕まえないこと、父のもとに行かせることについて、聖なる聖母〔の聖像画〕に接吻して、わたしに〔誓って〕下さい。そうすれば、わたしは自らあなたの前に出頭して、拝礼いたします<sup>72)</sup>」。

イジャスラフ [D112:I] はかれ〔グレーブ〕の聖なる聖母に接吻して、かれにこう言った。「そなたたちは、わしにとって身内の兄弟である。そなたたちに言うことはなにもない。わしを侮辱したのは、そなたの父である。かれは、われわれとともに生きることはできない」。

そこで、グレーブ [D178] は城市から出て、イジャスラフ [D112:I] に拝礼した。イジャスラフ [D112:I] はかれ〔グレーブ〕を自分のところの食事に呼び、食事をして、そこから、かれを伴ってドロゴブージへ行った。そこで、かれ〔グレーブ〕に、自分の息子ムスチスラフ [II] を監視としてつけて、**[396]** コレチェスク<sup>73)</sup> (Коречьск) まで行かせた。このようにして、連れて行き、コレチェスクを過ぎたところで、ムスチスラフ [II] はかれ〔グレーブ〕に言った。「兄弟よ、自分の父のところに行くがよい。ここはわが父〔イジャスラフ [D112:I]〕の領地であり、ゴリニ川流域 (по Горину)<sup>74)</sup> はわしの領地なのだから」。

こうして、グレーブ [D178] は、そこからウシェスク (Ушескъ)<sup>75)</sup> の方面へ、自分の父のもとへと向かった。

他方、イジャスラフ [D112:I] は、黒頭巾族の〔居留地である〕ゴリスコ (Гольско) とクニーリ (Куниль)<sup>76)</sup> へと進軍した。そこでは、かれ〔イジャスラフ〕のもとにすべての黒頭巾族がかれらの全軍を率いてやって来て、かれは大いに喜んだ。

ユーリイ [D17] は、そのことを知らなかった。かれは、〔イジャスラフ〕がこの〔ゴリニ川流域の自分の〕領地を占領してしまったのなら、その場所に〔イジャスラフ〕はとどまっているだろう思い込んでいたのである。そして、イジャスラフ [D112:I] が黒頭巾族のもとに到着したことも知らなかった。

---

71) グレーブ [D178] の父ユーリイ [D17] のところ、すなわちキエフを指している。

72) 少し前の軍使の挨拶の「拝礼」(ся кланяю)と同じく、降伏・服従をあらわす儀礼的身ぶり。

73) コレチェスク (コルチェスク) (Корчесьск) は、ドロゴブージから東へ50km程度の地点に位置する城砦都市。

74) 「ゴリニ川」(Горинь; Горынь; Горина) は、プリピャチ川右岸の支流で、現在のホルイニ (Горинь) 川のこと。ペレソプニツァ、ドロゴブージはその上流に位置する城市である。

75) ウシェスク (Ушескъ) は、ドニエプル川支流ウージ (Уж) 川の上流域左岸に位置する城砦で、コルチェスクからは東へ100kmほど行ったところにある。ここからウージ川を下りドニエプル川に入ればキエフに達する。現在のウシツァ (Ущица) 村に相当する。

76) ゴリスコ (Гольско) とクニーリ (Куниль) の位置については不明。ルイバコフは、シュームスク (Шумск) の北東に特定しており [Рыбаков 1951]、その場合、イジャスラフ [D112:I] は南下したことになる。

77) ユーリイ [D17] はキエフに踏みとどまることができず、自分の息子たちを引き連れてドニエプル川を渡河し、オステル川河口のゴロドク<sup>78)</sup> (Городокъ Вострыский) へと逃れた。

イジャスラフ [D112:I] は自分の部隊を率いて、キエフへと近づいた<sup>79)</sup>。

ヴァチェスラフ [D16] は、すでにキエフに入っていた。それは、かれの兄弟〔ユーリイ [D17]〕が対岸<sup>80)</sup> へと去って行った時だった。かれは、入城すると、ヤロスラフの館<sup>81)</sup> に居を構えた。

キエフ人は、イジャスラフ [D112:I] が進軍してやって来ることを聞いて、多数の者たちが城外に出て、イジャスラフ [D112:I] を出迎えた。かれらはイジャスラフ [D112:I] に言った。「ユーリイ [D17] はキエフを出ました。ヴァチェスラフ [D16] はキエフに座していますが、われらはかれ〔ヴァチェスラフ〕を〔公として〕望みません」。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、ヴァチェスラフ [D16] に使者を遣って、かれに言った。「わたしは、キエフに座すようあなたに呼びかけたではないか。ところが、あなたはそれを望まなかった<sup>82)</sup>。今、**[397]** あなたの兄弟〔ユーリイ [D17]〕が城を出たことを見届けると、あなたはキエフに座している。今は、自分のヴィシエゴロドに行くがよい」。

キエフ人はイジャスラフ [D112:I] に言った。「あなたは、われわれの公です。聖ソフィアに行ってください。自分の父、自分の祖父の座にお就き下さい」。

ヴァチェスラフ [D16] は、自分の家臣たちをイジャスラフ [D112:I] のもとに〔使者として〕派遣して、かれにこう言った。「息子よ、もしお前がわしをこの場所で殺そうというのなら、殺すがよい。わしは〔ヴィシエゴロドへは〕行かない」。

イジャスラフ [D112:I] は、聖ソフィアに拝礼をした。そして、自分のすべての部隊とともに

---

77) ここは、唐突にユーリイ [D17] が息子たちとともにキエフを逃げ出す記述になるが、この前に、イジャスラフ [D112:I] のキエフへの進軍について書かれていたことが想定される。

78) 「ゴロデツ」(Городец) とも呼ばれ、ユーリイ [D17] にとっては特別な支配城市であったことが、年代記から推測される。[イパーチイ年代記(3):注167]を参照。

79) タティーシチェフは、その後にユーリイ [D17] が再度キエフを回復した日付を、1150年8月28日としている。これ以降の記事は一日刻みで事態の変化が記されていることから、この日付から逆算すると、イジャスラフ [D112:I] のキエフ到着は1150年8月20日となる。[Літопис руський, 1989: С. 230]

80) ゴロドクはキエフの丘から見るとドニエプル川の対岸の方向にあたる。

81) 「ヤロスラフの館」(Ярославль двор) については1146年の記事にも見えるが、キエフの丘のウラジーミル街区の北東にあった大規模な木造の建物で、二階の広大な「階上の間」(сени, сенницы) は、キエフ公が従士たちとともに座し、協議や宴会を行う場所になっていた [Каргер 1958: С. 268-270]。

82) イジャスラフ [D112:I] がヴァチェスラフ [D116] にキエフの公座に就くように呼びかけたが、ヴァチェスラフが拒否したという記述は、これまでの年代記に見当たらない。状況から判断して次の経緯が想定できる。すなわち、1150年春(本稿注56参照)の和議の際に、イジャスラフはまずヴァチェスラフがキエフの大公位に就くことを主張したが、ヴァチェスラフがすでにユーリイに大公位を譲る約束(十字架接吻)をしていることを理由に断った、そのためイジャスラフはやむなく、ユーリイにキエフを引き渡すことを認めた、ということではないだろうか。本稿注63も参照。

ヤロスラフの館に入った。多くのキエフ人が、かれとともにやって来た。その時、ヴァチェスラフ [D16] は階上の間<sup>83)</sup>に座していた。多くの者がイジャスラフ公 [D112:I] にこう言い始めた。「公よ、かれ〔ヴァチェスラフ [D16]〕を捕まえなさい。かれの従士たちを捕虜にとりなさい」。次のように言う者もいた。「かれ〔ヴァチェスラフ〕の居る階上の間〔の床を〕下から切って<sup>84)</sup>しましましょう」。

イジャスラフ [D112:I] は言った。「どうか、神がわしにそのようなことをさせないように。わしは自分の兄弟を殺すような者ではない。この人〔ヴァチェスラフ〕はわしにとって父のような方であり、父方の叔父である。わしは少数の従士を連れて、自分でかれ〔ヴァチェスラフ〕のもとへ登って行こう」。

こうして、かれ〔イジャスラフ〕は自分の叔父のヴァチェスラフ [D16] のいる階上の間へと登り、かれに拝礼した。ヴァチェスラフ [D16] はイジャスラフ [D112:I] を前にして立ち上がり、互いに接吻を交わした。そして二人は同じ場所に座した。

イジャスラフ [D112:I] はヴァチェスラフ [D16] にこう言った。「父よ、あなたに拝礼します。わたしは、ここで、あなたと〔和平の〕協議をすることはできません。人々の軍勢が見えませんか。部隊が待機しているのです。あなたに、多くの悪しきことを企んでいるのです。どうか、自分のヴィシエゴロドへ行って下さい。そうすれば、わたしはあなたと協議をするでしょう」。

ヴァチェスラフ [D16] はこう言った。「息子よ、そなた自身が【398】わしをキエフ〔の公座に就くように〕に呼びかけたのではないか。〔そのときは〕わしは、自分の兄弟ユーリイ [D17] にすでに十字架接吻して〔誓った〕から〔公座に就かなかったの〕である<sup>85)</sup>。息子よ、今はこのような状況であるのだから、キエフはそなたのものだ。わしは自分のヴィシエゴロドへ行く」。こうして、ヴァチェスラフ [D16] は、階上の間を降りて、自分のヴィシエゴロドへと出発した。

イジャスラフ [D112:I] はキエフに座した。そして、自分の息子ムスチスラフ [I1] をカーネフ<sup>86)</sup>へと派遣して、その場所からベレヤスラヴリ<sup>87)</sup>を獲得するよう命じた。ムスチスラフ [I1]

---

83) 「階上の間」の原文は сенници で、сени とも言う。この語が公の館のことを言うときには、階段を登った二階にある屋根が付いた廻廊式の部屋のこと。その空間は、酒宴や公同士の協議の場になるほど広かった。

84) 張り出しになっている階上の間の床や壁を下から破って、突入するということ。

85) この経緯については、前注 82 を参照。

86) カーネフはキエフ公領内の城市としては、もっともベレヤスラヴリに近く、キエフ公がベレヤスラヴリと戦うときには拠点となった。[イパーチイ年代記(3):386頁、注306]を参照。

87) ロスチスラフ [D171] は、父ユーリイ [D17] がキエフを脱出した後も、ベレヤスラヴリの城市に残っていた。

は対岸の<sup>88)</sup>、自分の〔味方の〕トゥルベイ<sup>89)</sup>人(турпей)とその従士たちのところ<sup>90)</sup>へ出向いて行って、自分の所に来るようにと命じた。

ロスチスラフ [D171] はこのことを聞くと、ゴロドクの父親(ユーリイ [D17])に使者を遣って、かれに援軍を要請した。ユーリイ [D17] はかれ〔ロスチスラフ〕のもとに援軍として、その弟のアンドレイ [D173] を派遣した。ロスチスラフ [D171] は、弟〔アンドレイ〕をペレヤスラヴリに残して、自分はサコフ<sup>91)</sup>(Саков)まで急行し、ドニエプル川河岸でトゥルベイ人を襲撃して、かれらを捕まえると、ペレヤスラヴリへと連行した。

その頃、ユーリイ [D17] は、ゴロドクから、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、その兄弟のイジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、その甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] 等に使者を派遣して、かれらに対してこう言った。「見よ、イジャスラフ [D112:I] がわしをキエフから追い出して、〔イジャスラフ〕自身がキエフ〔の公位に〕に座した。来たりて、わしを助けよ」。

他方、イジャスラフ [D112:I] は、ヴィシェゴロドのヴァチェスラフ [D16] に使者を遣り始めた。ヴァチェスラフ [D16] は、イジャスラフ [D112:I] と協調をし始めた。

その頃、ウラジミルコ [A121] はガーリチを發って、自分の姻戚<sup>92)</sup>であるユーリイ [D17] を助け、イジャスラフ [D112:I] を討伐するためにキエフへと向かっていた。

イジャスラフ [D112:I] のもとに報告がもたらされた。ウラジミルコ [A121] が、すでに

---

88) カーネフからドニエプルを下り、対岸(左岸)のサコフ(Саков)(次注91)へ行ったということ。

89) トゥルベイ人(турпей)は、ベレンディ人、トルク人と並んで「黒頭巾族」を構成する、チュルク系の部族もしくはその族長の呼び名。黒頭巾族はイジャスラフ [D112:I] の側に立ってしばしば戦闘に加わっていることから、トゥルベイ人は黒頭巾族と協調関係にあったか、その一部と見なされていたのだろう。ムスチスラフ [I] は「サコフ」(Саков)(次注91)に居住していたかれらの援軍を得て、ペレヤスラヴリの公座を獲得しようとしたが、結局は失敗することになる。

90) ムスチスラフ [I] は、カーネフからドニエプル川を渡って、対岸(左岸)のサコフ(次注91)へと行ったことになる。

91) 「サコフ」(Саков)は、リュバコフの地図によると、スーラ(Сула)川河口付近のドニエプル左岸にあり、ペレヤスラヴリからドニエプル川を下った南東方向約50kmほど離れた場所に位置している。『イパーチイ年代記』1142年と1146年の項に、キエフの千人長ラザリ・サコフスキイという人物が見えるが、この城市の出身者だった可能性がある。

92) 先の注61にあるように、1150年にユーリイ [D17] の娘がウラジミルコ [A121] の長男ヤロスラフ [A1211] に嫁いだばかりで、姻戚関係が結ばれていた。

ボロホフ<sup>93)</sup>(Болохов)の地を通して、ムナレフ(Мунарєв)<sup>94)</sup>を通り過ぎ【399】、ヴォロダレフ<sup>95)</sup>(Володарєв)へと向かっているというのである。イジャスラフ[D112:I]は自分の息子ムスチスラフ[I1]に使者を遣って<sup>96)</sup>、かれに言った。「ガーリチのウラジミルコ[A121]がわしを討ちにキエフへと向かっている。また、こちらからは<sup>97)</sup>ユーリイ[D17]がオレーグ一族〔の諸公〕とともにやって来る。ベレンディ人を連れて、すぐに来たれ」。

イジャスラフ[D112:I]自身はまた、配下の貴族たちを連れて、ヴィシエゴロドのヴァチェスラフ[D16]のところへ行った。そして、イジャスラフ[D112:I]は、ヴァチェスラフ[D16]にこう言った。「あなたは、わたしにとって父にあたる方です。さあ、あなたにキエフを、領地として渡しましょう。これは、あなたに相応しいことです。これを取りなさい、そしてわたしには、他のものを与えて下さい」。

ヴァチェスラフ[D16]は怒りを含んで、イジャスラフ[D112:I]に向かってこう言った。「そなたは、あの日<sup>98)</sup>に、なぜわしに〔キエフを〕与えなかったのだ。わしは、大きな辱めを受けてキエフを去ったのだ。ところが、ガーリチから軍隊が、チェルニゴフから別の軍隊が来る時になって、そなたはわしにキエフを与えるというのか」。

イジャスラフ[D112:I]は、ヴァチェスラフ[D16]にこう言った。「わたしは、あなたに何度も使者を派遣して、キエフをあなたに与えると言いました<sup>99)</sup>。そのとき、わたしはあなたに『あなたとは共に居ることができますが、あなたの兄弟のユーリイ[D17]とはうまくやっていくことはできない』と声明したのです。しかし、わたしは、あなたを父として敬愛しています。今はあなたに言明します。『あなたは、わたしの父であり、キエフはあなたのものである』と。

---

93) 「ボロホフ」(Болохов)は地域名で、ブク川の中流域、ガーリチ公領とキエフ公領との境界一帯を指している。年代記ではここがこの地名の初出。この地の住民(болоховцы)については、ボロの一部族とする説や、ボロヴェツ人とルーシの逃亡民の混合とする説、ワラキア人(ルーマニア)の一部とする説などがある。いずれにせよ、ガーリチ公にもキエフ公にも完全に服従してはいなかった。ここでも、そのような危険な地帯を通過してという意味合いがあるのだろう。

94) ムナレフ(Мунарєв)の場所については定説はないが、キエフから南西に約55kmに位置する、ヴェリカヤ・スネティンカ(Великая Снетинка)に同定する説がある。その場合、地理的な位置からすると「ヴォロダレフを通り過ぎてムナレフに向かう」となるはずである。年代記編者の誤解に発するものか。

95) ヴォロダレフ(Володарєв)はロシ(Рось)川上流域左岸に位置する城砦で、現在のヴォロダルカ(Володарка)に相当する。キエフからは、南南西に115kmほど離れている。

96) この時点で、ムスチスラフ[I]は、父親に派遣されたカーネフ(Канєв)にいたと考えられる。

97) キエフに近い側、つまりユーリイがいるゴロドクを指していると考えられる。

98) キエフに入城したイジャスラフ[D112:I]が、キエフのヤロスラフの館の階上の間にいたヴァチェスラフ[D16]をヴィシエゴロドに追放した日。本稿注 79 を参照。

99) イジャスラフ、ヴァチェスラフ、ユーリイの三者の最初の交渉(本稿注 32 参照)のときから、1150年の和議の締結(本稿注 56 参照)に至るあいだ、イジャスラフは一貫して、ヴァチェスラフがキエフの公位に就くことを主張していたことを指している。本稿注 82, 85 も参照。

どうか、わたしたちのもとに来て下さい」。

ヴァチェスラフ [D16] はこれを聞いて、かれ〔イジャスラフ〕のことを好ましいと思った。こうして、かれらは、殉教二聖人の棺<sup>100)</sup>のもとで、十字架接吻を行って、イジャスラフ [D112:I] はヴァチェスラフを [D16] を父とし、ヴァチェスラフ [D16] はイジャスラフ [D112:I] を子とすることを〔誓った〕。二人の配下の家臣たちも十字架接吻を行い、これからは互いの間で善を行い、名誉を守り、不和を煽り立てることをしないこと〔を誓った〕。

イジャスラフ [D112:I] は殉教二聖人と自分の父ヴァチェスラフ [D16] に拝礼して、かれ〔ヴァチェスラフ〕に言った。「父よ、あなたは案ずることはありません。【400】 わたしが、ズヴェニゴロド<sup>101)</sup> (Звенигород) へ行って、ウラジミルコ [A121] に対抗しましょう。父よ、あなたさえよろしければ、ご自身はキエフに行ってください」。ヴァチェスラフ [D16] は〔答えて〕言った。「息子よ、わしの手元にいるわしの従士たちは、すべてそなたと一緒に行かせよう」。

イジャスラフ [D112:I] は〔ヴィシエゴロドから〕キエフに戻り、ラッパ〔と銅鑼〕を鳴らしてキエフ人たちを呼び集め、自分の部隊とともに、ウラジミルコ [A121] に対抗すべく進軍を始めた。そのとき、かれ〔イジャスラフ〕はこう言った。「見よ、かれ〔ウラジミルコ〕はわしの近くにいる、かれに先んじて行こう」。こうしてかれ〔イジャスラフ〕は弟のウラジミル [D115] と自分の息子のムスチスラフ [I1] を連れて、ズヴェニゴロドへ向かって進軍し、そこに到着すると、部隊とともに陣営を構えた。

かれ〔イジャスラフ〕のところへ報告がもたらされた。ウラジミルコ [A121] は、すでにペレペトヴォ<sup>102)</sup> (Перепетово) の野を越えたというのである。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、ズヴェニゴロドからトゥマシチ<sup>103)</sup> (Тумаш) へと向かった。そこへ、かれ〔イジャスラフ〕のところへ、黒頭巾族がやって来た。かれらは、自分たちの妻子をロシ川沿岸にある城砦内に閉じ込めておいて、自分たちは全軍を率いてイジャスラフ [D112:I] のもとにやって来たのであ

100) ヴィシエゴロドの教会に安置されている、聖ボリスと聖グレーブの棺のこと。教会は1020年に建設され、1072年に棺が安置され、1115年に石造りに改築されて、移葬式が行われている。

101) 「ズヴェニゴロド」(Звенигород) は、『原初年代記』1097年の記事のイパーチイ写本系統にのみある地名で「夜になって、キエフからおよそ10露里の小さな城市ズヴェニゴロドへかれ(ヴァシリコ [A13]) を連れて行った」とされる城市と同一と考えられる。キエフにとっては外城の役割を果たしていたと思われ、研究者によれば、キエフの丘から約16km 南西に位置する、現在のヴィタ=ポシトヴァ (Віта-Поштова) の遺構に同定する説もある。[РУИНА.RU: Вета-Почтовая]

102) 「ペレペトヴォ」(Перепетово) は、ストウグナ川(Стугна)とロシ川(Рось)の間に広がる平原のこと。キエフからは南の方向にあたる。

103) 「トゥマシチ」(Тумаш) は、ストウグナ川左岸に位置する城砦で、キエフにとって、南方からの外敵の防衛の拠点の一つだった。現在のスタリ・ベズラディチ村(Старі Безрадичі)に相当する。ズヴェニゴロドからは20km ほど南東に下ることになる。



る。

翌日の早暁、イジャスラフ [D112:I] は戦闘準備を調べ、自分の部隊を率いて、ウラジミルコ [A121] と戦うために、ストウグナ (Стугна) 川を渡河し、オルシャニツァ<sup>104)</sup> (Олшаниця) 川を渡ろうとした。

その時、ウラジミルコ [A121] はオルシャニツァ川の上流に、部隊を布陣させていた。そこに、まだ日の出の前に、イジャスラフ [D112:I] 陣営から騎兵がやって来て、かれ〔ウラジミルコ〕の騎兵に打撃を加え、ウラジミルコ [A121] の家臣を数人捕まえた。同様に、黒頭巾族の家臣たちも捕まって<sup>105)</sup>、ウラジミルコ [A121] のところに引き立てられていった【401】。

ウラジミルコ [A121] は、イジャスラフ [D112:I] がすでにオルシャニツァ川を渡河したことを聞いた。ウラジミルコ [A121] は戦闘準備をして、イジャスラフ [D112:I] に向かって進軍し、川をはさんで射手たちは矢を射合った。ウラジミルコ [A121] は軍勢とともに突進し始めた。

邪教徒ども<sup>106)</sup>は、ウラジミルコ [A121] の大軍勢を見て恐れおののいた。イジャスラフ [D112:I] は小勢だった。ヴァチェスラフ [D16] の部隊は間に合わず、かれ〔イジャスラフ〕のところに到着していなかった。黒頭巾族は、イジャスラフ [D112:I] にこう言い始めた。「公よ、かれ〔ウラジミルコ〕の軍勢は多く、あなたの従士団は少数です。かれ〔ウラジミルコ〕が川を渡ってわれらに向かってこなければよいのですが。どうか、われらを滅ぼさないで下さい。自分も滅びないようにして下さい。あなたはわれらの公です。もし、あなたに大軍があれば、われらとともに〔戦う〕でしょう。いまはあなたの〔戦う〕時機ではありません。引き上げて下さい」。

イジャスラフ [D112:I] は、かれらに言った。「兄弟よ、われらはここ死んだほうがまだ、このような辱めを受けるよりも」。キエフ人たちも、「公よ、どうか引き上げて下さい」と言って、執拗にかれ〔イジャスラフ〕に説き始めた。キエフ人たちはそう言うと、かれ〔イジャスラフ〕のもとから逃げ出してしまい、黒頭巾族たちもそこから逃げ出して、自分たちのもとへと戻っていった。

イジャスラフ [D112:I] はこれを見て、自分の従士たちに言った。「もはや、わしは余所者であるハンガリー人とポーランド人とともに〔戦いに〕行くしかないのか。わしの従士たちも怯えているではないか」。こうして、かれ自身も逃げ出した。

---

104) 「オルシャニツァ川」(Олшаниця) 川は、ストウグナ川右岸の支流で、現在のラクウカ (Раківка) 川に相当する。

105) 黒頭巾族の軍使が情報をとるための捕虜 (язык) として捕まったか、ウラジミルコの斥候兵が捕まえたものだろう。

106) 「邪教徒ども」は原文では поганини で文脈からすると「黒頭巾族」を指している。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではここは берендѣве すなわち「ベレンディ人たち」となっている。



ウラジミルコ [A121] は、キエフ人が逃げていき、そのあとから黒頭巾族もこちらへと〔逃げて〕行くのを見て、こう言った。「これは人を欺く見せかけである。イジャスラフ [D112:I] は、自分の部隊とともに、どこか丘の陰に隠れているに違いない」。そのために、イジャスラフ [D112:I] のすべての部隊は、無事なままで、かれら〔従士たち〕は混乱することなく **[402]** 隊形を維持したのだった。

イジャスラフ [D112:I] は、キエフへと逃げ戻った。ウラジミルコ [A121] の従士たちは、かれの〔部隊〕のあとを追撃して、ある者たちを捕虜にし、ある者たちを撃ち倒した。

ヴァチェスラフ [D16] は、かれ〔イジャスラフ〕が戻ってくる前にすでにキエフに入城して、ヤロスラフの館に座していた。イジャスラフ [D112:I] は、自分の父であるヴァチェスラフ [D16] のところにやって来ると、そこで協議して、ふたりは食事をとった。

その頃、ユーリイ [D17] は、自分の息子たちとともに、またウラジーミル・ダヴィドヴィチ<sup>107)</sup> [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ<sup>108)</sup> [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ<sup>109)</sup> [C43]、その甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] 等が、キエフの対岸の河岸のところまでやって来た。キエフ人の多くが、小舟に乗ってユーリイ [D17] のもとに駆けつけ、また他の者〔キエフ人〕はかれ〔ユーリイ〕の従士たちを、小舟で対岸のポドリエ街区まで運んでいた。

これを見て、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、こう言った。「われら二人にとっては、今は不利な時機である」。イジャスラフ [D112:I] は、自分の父であるヴァチェスラフ [D16] に言った。「父よ、自分のヴィシエゴロドへ行って下さい。わたしは、自分のヴラジミル<sup>110)</sup> へと行きます。その日々が終われば、神が定めるようになるでしょう」。こう言うと、二人はそれぞれ出発した。ヴァチェスラフ [D16] は、ヴィシエゴロドへ、イジャスラフ [D112:I] は、自分のヴラジミルへと。

---

107) 当時はチェルニゴフの公座に就いていた。

108) 当時は、おそらくスタロドゥーブにいたと思われる。

109) スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、甥のスヴァトスラフ [C411:G] とともにノヴゴロド・セヴェルスキイの公座に就いていた。

110) イジャスラフ [D112:I] は、ヤロ波尔ク・ウラジーミロヴィチ [D15] がキエフ大公であった 1135 年冬に起きた内乱を収める際に、アンドレイ善良公 [D18] の座していたヴラジミル・ヴォルィンスキイを得ている。1142 年に一度スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の手に渡るが、1146 年からは再びイジャスラフ [D112:I] の所有するところとなった。

イジャスラフ [D112:I] は自分の従士たちに、ドロゴジチ<sup>111)</sup> (Дорогожичь) で集合するように命じ、自分自身は夜を待ってキエフを脱出し、出発した。

翌日の日中に、ガーリチのウラジミルコ [A121] は、オレーグの墓<sup>112)</sup> のところまでやって来た。同じくユーリイ [D17] も、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、その兄弟のイジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と共に、かれ〔ウラジミルコ〕のところへとやって来た。【403】

そこで、かれらは、セトムリ<sup>113)</sup> (Сѣтомль) 川の沼地では、馬から降りることをせずに、接吻の挨拶を交わした。かれらは評議して、イジャスラフ [D112:I] を召喚するための使者として、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とボリス・ユーリエヴィチ [D170] を派遣した。かれらはチェルトフの森<sup>114)</sup> (Чертов лѣс) まで〔イジャスラフ [D112:I] たちを〕追いかけたが、追い付くことはできず、戻って来た。

ウラジミルコ [A121] はヴィシェゴロドへと、聖なる殉教者たち<sup>115)</sup> に拝礼するために出かけた。そして、聖なる殉教者たちに拝礼すると、〔キエフに戻って〕聖ソフィア聖堂にやって来た。そこから、聖なる十分の一の聖母教会<sup>116)</sup> へ行き、そこから洞窟修道院の聖なる聖母〔教会〕<sup>117)</sup> へと向かった。

その時、イジャスラフ [D112:I] はゴルイニ川流域<sup>118)</sup> (Погорина) を占領し、自分の息子のム

---

111) 『イパーチイ年代記』の読みは「ドロジチ」(Дорожичь) だが、『ラヴレンチイ年代記』並行記事は Дорогожичь となっており、こちらが正しい。キエフのポドリエ街区の北に面し、ポチャイナ川沿いに広がる一帯の名称で、ここではキリル修道院(Кирилловский монастырь) 近くの森を指すと考えられる。

112) 「オレーグの墓」(Ольгова могила) はキエフの丘の北西に隣接するシチェコヴィツァの丘(Щековица) にあったと推定されている。[イパーチイ年代記(2): 注 345] を参照。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では, теремьць のところに布陣したとある。丘の墓の傍らに「塔」あるいは「邸」が建っていたということか。

113) 「セトムリ」(Сѣтомль) は「シトムル」(Ситомл) とも言い、キエフ北郊外の、ポチャイナ川に注ぐ小川。キエフの丘から 3km ほど離れており、現在のシレツ川(Сирец) に相当する。

114) 「チェルトフの森」(Чертов лѣс) は、Чертолесы, Пулины とも言い、現在の Червоноармейск(ウクライナ語 Червоноармійськ) に相当する。キエフからだと西に約 160km 離れた地点にある。

115) 聖ボリス公と聖グレーブ公のこと。

116) 聖公ウラジーミル [08] が、996年にキエフのウラジーミル街区に建立した、十分の一(デシャチンナヤ)教会のこと。聖母の祝日(もしくは聖母そのもの)に献堂されたものだった。[ロシア原初年代記: 447,465頁] 参照。

117) 洞窟修道院の主聖堂である「聖母就寝」(Успенский)教会を指している。

118) ポゴリナ(Погорина)とは、プリビャチ川の支流ゴルイニ(Горынь)川の流域を指し、ドロゴブージ、ベレソブニツァはその中心的な城市である。

スチスラフ [I1] をドロゴブージ (Дорогобужи) に据えて、自分は兄弟<sup>119)</sup>とともにヴラジミルへと向かった。

キエフ人たちはガーリチのウラジミルコ [A121] を恐れて、ユーリイ公 [D17] をキエフへと導き入れた。ユーリイ [D17] はキエフに座すと、洞窟修道院で<sup>120)</sup>ウラジミルコ [A121] と会合し、二人はお互いに大なる親愛を結んだ。

ウラジミルコ [A121] がユーリイ [D17] のもとからガーリチへと〔帰国するために〕向かうとき、ユーリイの息子のムスチスラフ [D17j] を連れて行った。かれ〔ウラジミルコ〕がドロゴブージへと近づくと、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] はドロゴブージから逃げだして、ルチェスク (Люцьск) にいる自分の父方の叔父スヴァトボルク [D114] のところへと向かった。

ウラジミルコ [A121] は、〔ドロゴブージの〕城市をすべて掠奪すると、さらに進軍し、ルチェスクへと近づいた。スヴァトボルク [D114] とムスチスラフ [I1] はこの城市に立て籠もった。ウラジミルコ [A121] は、〔ルチェスクに〕やって来たが、なすすべもなく、ガーリチへと向かった。かれは、ムスチスラフ・**[404]** ユーリエヴィチ [D17j] を、ペレソプニツァの城市に〔支配公として〕据えた。

その年、ポロヴェツ人が、ユーリイ [D17] のイジャスラフ [D112:I] 討伐を助けるために到来し、ペレヤスラヴリへとやって来た。ユーリイ [D17] は、まだ兵を解散することなく、オレーグ一族の諸公を帰らせることもしていなかった。

かれ〔ユーリイ〕はスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を、ペレヤスラヴリの、自分の息子ロスチスラフ [D171] のもとへ派遣した。それは、かれら〔ポロヴェツ人の所業〕を鎮圧して、帰国させるためだった<sup>121)</sup>。この者ども〔ポロヴェツ人〕に蹂躪された人々は、〔ペレヤスラヴリの〕城内へと逃げ込み、家畜を〔放牧のために〕城内から出すことさえ出来なかった。ユーリイ [D17] は〔さらに〕、自分の息子アンドレイ [D173] を派遣した。かれ〔アンドレイ〕はペレヤスラヴリにやって来ると、ポロヴェツ人と和議を結んだ。

スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、キエフのユーリイ [D17] のもとに戻って来た。アンドレイ [D173] は、ペレヤスラヴリの兄〔ロスチスラフ [D171]〕のもとにとどまっ

---

119) イジャスラフ [D112:I] の弟ウラジミル [D115] のこと。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ウラジミル」の名が記されている。

120) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「洞窟修道院の聖なる聖母のもとで」となっている。

121) ポロヴェツ人は、ユーリイ [D17] への支援を名目にペレヤスラヴリに迫ったが、同時に、この城市の周辺地を掠奪していたことがわかる。

た。尊い十字架の挙栄の祭日<sup>122)</sup>を祝うためだった。聖ミハイル教会<sup>123)</sup>で主の十字架の尊い祭日を祝ってから、その翌日にアンドレイはキエフの父親のところへと出発した。

その年の秋、ユーリイ [D17] は、自分の息子のアンドレイ [D173] に、トゥーロフ、ピンスク (Пинескъ) とベレソプニツァ [の諸城市] を与えた<sup>124)</sup>。アンドレイ [D173] は、自分の父親に拝礼すると、出発して、ベレソプニツァの座に着いた。

その年の冬、イジャスラフ [D112:I] は、ベレソプニツァのアンドレイ [D173] に使者を派遣し始め、こう言っていた。「兄弟よ、和議のために、わしをそなたの父親のところに導いてくれ」。そして、かれに使者を派遣する度に、かれ [アンドレイ] の軍備の状況や、城市がどのように守られているかを観察していた。なぜならば、[イジャスラフは]、かつてかれ [アンドレイ] の弟のグレーブ [D178] をベレソプニツァで襲撃したことがあり<sup>125)</sup>、【405】このときもまた、かれ [アンドレイ] に罫を仕掛けようとしていたのである。しかし、かれ [イジャスラフ] の思惑は実現しなかった。なぜなら、城市は固められており、従士たちを集めて配備していたからである。

イジャスラフ [D112:I] は [アンドレイに] 請願してこう言っていた。「わしにとって父の地は、ハンガリーにも、ポーランドにもない。ルーシの地にあるだけだ。どうか、父上に、ゴルイニ川流域 (Погорина) の領地をわたしに [与えるように] 頼んでほしい」。アンドレイ [D173] はイジャスラフ [D112:I] のために、父親に請願したが、[父のユーリイは] かれ [イジャスラフ] に領地を与えようとはしなかった。

イジャスラフは言った。「わしの父方の叔父 [ユーリイ] は、領地を与えず、わしをルーシの地に置いてくれようとはしない。一方、ガーリチのウラジミルコ [A121] は、かれ [ユーリイ] の命令によって、わしから領地を取り上げ、再び、わしを討とうと、わが [城市の] ヴラジミルへ進軍しようとしている」。

そこで、イジャスラフ [D112:I] は評議して、自分の弟のウラジミル [D115] を、姻戚であ

---

122) この十字架挙栄祭は、4世紀に、コンスタンティヌス帝の母ヘレナがエルサレムでイエス・キリストの十字架を発見したことを記念する祭日で正教の12大祭の一つ。この日は、1150年の9月14日に当たっている。

123) ベレヤスラヴリの首座教会を指している。

124) アンドレイ [D173] にゴルイニ川水系の主要都市ベレソプニツァとプリピャチ川の拠点都市トゥーロフ、ピンスクが与えられたのは、すぐ西に接するイジャスラフ [D112:I] の支配下にあるヴラジミル公領に最前線で対抗するためだろう。ベレソプニツァは、一時ヴァチャスラフ [D16] が公支配していたこともあり、領地としては豊かだったと考えられる。

125) 1150年の春頃に、イジャスラフ [D112:I] は、ルチェスクを出た翌日に、グレーブ [D178] のいるベレソプニツァを襲撃している。本稿注69を参照。

るハンガリーの王<sup>126)</sup>のもとへと派遣した。そして、王にこう言った。「かつて、そなたは『ウラジミルコ [A121] は頭を上げる<sup>127)</sup> ことは敢えてしないだろう』とわしに言ったことがある。そこで、わしは、ユーリイ [D17] をキエフから追いだし、ユーリイ [D17] はわしの目の前で逃げ出した。ところが、ウラジミルコ [A121] がやって来て、オレーグ一族〔の諸公〕と話を付けて、わしをキエフから追いだした。兄弟よ、今こそ、そなた自身がわしに言ったように。乗馬〔進軍〕して来たれ。

王はこれを聞くと、自分の全士の〔兵〕と、自分の従士たちと、自分のすべての部隊を召集した。こうして、王は自分の全軍を集めて、馬に乗った〔進軍した〕。また、〔王は〕イジャスラフ [D112:I] に向けて自分の家臣たちを〔使者として〕派遣して、かれにこう言った。「わしは、そなたの弟のウラジーミル [D115] **[406]** とともに、すでにここを出発した。そなたも、そこから発たれよ、全員で合流しようではないか。ウラジミルコ [A121] は、誰を侮辱したかを知ることになるだろう」。

ウラジミルコ [A121] にはハンガリーに仲間がおり、その者がウラジミルコ [A121] に使者を遣って、〔ハンガリー〕王がかれ〔ウラジミルコ〕を討つためにすでに進軍していることを伝えた。その時、ウラジミルコはベルズ<sup>128)</sup> (Белз) に陣を張っていた。かれ〔ウラジミルコ〕はそこで、〔ハンガリー〕王がすでに山脈<sup>129)</sup> に入ったとの報を聞き、自分の輜重車を放り出して、自分は自らの従士たちとともにペレムィシェリへ向けて急行した。

〔ハンガリー〕王は山脈を越えて、サノク<sup>130)</sup> (Санок) の城市を占領し、その代官を捕まえ、ペレムィシェリ近郊の多くの村落を掠奪した。

ウラジミルコ [A121] はこれを見ると、恐くなって、ククニシ<sup>131)</sup> (Кукниш) 大司教及び他に二人の司教に向けて使者を派遣した。また、王の家臣に向けても〔使者を遣った〕。こうして、請願をして、多くの黄金を与えて、王を引き返させるために賄賂を贈った。そして、請願のす

126) 当時のハンガリー王、ゲーザ二世（在位 1141-1162 年）のこと。

127) 原文は、голову склонити で「関心を示して行動を起こすこと」を意味している。

128) 「ベルズ」(Белз) は、ウラジミル公領のブグ川沿いにあり、ヤロスラフとボレスワフ一世の間で係争地となったチェルヴェンの南東に位置する城市。

129) カルパチア山脈を指している。ハンガリーから最短距離でルーシへ向かうためには、カルパチア山脈を縦断する必要がある。

130) サノク (Санок) は、ガーリチ公国とハンガリー国境地帯、ヴィスワ川支流のサン (Сан) 川左岸にある城市。プシェミシエルの上流で、そこから 50km ほど南西に位置し、現在のポーランドのサノク (Sanok) 市に相当する。ゲーザ王はすでに、ウラジミルの近くに迫っていることになる。

131) 「ククニシ」(Кукниш) 大司教とは、ハンガリーのカトリックの大司教座があったエステルゴムの大司教「コケニエス」(Kökényes) のこと。かれについては、この年（1150 年）に在位していたこと以外の記録はない。

えに王は帰国した。

〔ハンガリー〕王は、かれら〔家臣たち〕の言葉を聞いて、このように言った。「見よ、今はその時機ではない。川に氷が張り始めたばかりである。帰国しようではないか。川〔の氷が〕固まったら、そのときには神がわれらとかれらのことを定めてくれるだろう。もう、ドミートリイの日<sup>132)</sup>なのだから」。王はこう言うと、出発して、多くの悪事を、ウラジミルコとその支配地に対してなしながら〔帰国した〕。そのとき、かれ〔ハンガリー王〕は義弟<sup>133)</sup>であるウラジミル [D115] を伴って、ハンガリーへと連れて行った。

その頃【407】、イジャスラフ [D112:I] は、自分の義弟にあたる王と王の〔妻である〕自分の姉妹と話し合って、地方長官の娘<sup>134)</sup>をウラジミル [D115] に嫁がせることにした。〔王たちは〕かの女〔この娘〕を先行して、イジャスラフ [D112:I] のもとへ、ウラジミルへと送り出した。

そのために、ウラジミル [D115] は、自分の従士も軍馬もないという困難な状態になり、王のもとにとどまって活動を休止していた。王と〔ウラジミルの〕の姉妹<sup>135)</sup>、〔王の〕家臣たちは、かれ〔ウラジミル〕にあらゆる名誉ある〔待遇〕を与え、さまざまな贈物を与えて、兄のイジャスラフ [D112:I] のもとへと帰国させた。

帰国させるにあたって、王はウラジミル [D115] に言った。「わが父にして、そなたの兄であるイジャスラフ [D112:I] に拝礼して、おおよげにこう伝えよ。『ギリシアの皇帝がわたし〔ハンガリー王〕を討つべく遠征を企んでいる<sup>136)</sup>ため、わたしは、この冬と春は、あなた〔イジャ

---

132) テサロニケの殉教聖人ドミトリオスの祝祭日である 10 月 26 日を指している。

133) ゲーザ二世の妻はムスチスラフ [D11] の娘エフロシニヤで、かの女はウラジミル [D115] の姉妹にあたる。

134) ここで「地方長官」と訳したのは原文では бань で、当時は、ホルヴァチア、ボスニア、スラヴォニア、アルバニア、セルビア等の地方を統治する長官を指していた。「地方長官」はハンガリー王によって任命され、地方官(ジュパン)、司教、修道院長等を任命し、裁判を行い、軍を指揮し、貨幣を鑄造する権限をもっていた。[Древнерусские летописи, 1938 C. 355]。

この地方長官は、セルビアのラシュカ公であったペロシュ(洪: Belos ban)を指している。かれはセルビアのウロシュ一世とビザンツ皇女アンナ・ディオゲナの息子であり、ハンガリー王ゲーザ二世の母后イロナの兄弟(つまり王の伯叔父)にあたる人物である。かれは、先王ベーラ二世の死後、姉妹のイロナとともに、しばらくゲーザ二世の摂政として活躍した(1141-1146年)。イジャスラフ [D112:I] は、自身の姉妹をゲーザ二世に与えた上に、自身の弟ウラジミル [D115] の妻にペロシュの娘を据えることによって、ハンガリーのみならずセルビアとも姻戚関係による同盟を形成することになったと考えられる。

135) ゲーザ二世の妃のことで、ウラジミル [D115] にとつても姉妹にあたる。

136) 当時のビザンツ皇帝マヌイル一世コムネノス(在位 1143-1180年)は、後にハンガリー王ゲーザ二世とキエフ公女エフロシニヤの次男であるベーラ三世(在位 1172-1196)を娘婿に迎え、ハンガリーとビザンツを同君連合にすることを画策するなど、ハンガリーの領有を狙っていた。



スラフ]のもとに〔支援の〕ために馬に乗って〔進軍する〕ことはできない。しかし、父よ、あなたの盾とわたしの盾は別々ではない。自分が進軍できないとしても、援軍として1万の兵が必要であろう。あるいは、それ以上をわたしは派遣しよう。もし、夏に〔進軍する余裕を〕神がわたしに与えてくれるなら、わたしは、あなたの意志に従います。そのときには、われらは二人で、侮辱をはらそうではありませんか。そして、神がわれらを定めるでしょう<sup>137)</sup>』。

ウラジーミル [D115] は、兄のイジャスラフ [D112:I]のもとにやって来た。イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟が健勝であるのを見て、また弟の口から、王が味方してくれるという王の言葉を聴いて、大いに喜んだ。

そして、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟のウラジーミル [D115] に言った。「弟よ、そなたが、わしの名誉とそなた自身の名誉のために苦勞したことに對して、神の助けがそなたにあるように。わしの義妹としては、ここに長く居るが、そなたの妻になるのは長引いてしまったものだ」。【408】

その時、イジャスラフ [D112:I] は、ハンガリー人たちを扶養のために、ウスチログ<sup>138)</sup> (Устилогъ) へと派遣していた<sup>139)</sup>。こうして、イジャスラフ [D112:I] は使者を遣って、地方長官の娘を連れてこさせて、ウラジーミル [D115] に娶せた。大いなる喜びがあり、祝宴が催された。

その時、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、自分の兄イーゴリ [C42] の遺体を、〔キエフの〕コプイレフ街区の聖シメオン教会<sup>140)</sup> から、チェルニゴフへと移し、聖なる救世主変容教会の礼拝所<sup>141)</sup> に埋葬した<sup>142)</sup>。

137) 戦争によって決着を付けることを意味する定型的な文言。

138) 「ウスチログ」(Устилог) はヴォルニ地方の城市で、西ブグ川の右岸で、ルガ(Луга)川河口近くに位置していた。ウラジミルからは12kmほど西に位置している。現在のウクライナの都市ウスティルーフ(Устилуф)に相当する。

139) 傭兵などを扶養して維持していくために、自分の領地に派遣して、そこでの食料や生活用品を自由にさせること。このとき、ウラジーミル [D115] の婚約者はまだ、ハンガリー人たちの保護下に置かれていたと考えられる。

140) キエフ人に殺害されたイーゴリ [C41] の遺体が、コプイレフ街区にあるシメオン教会に運ばれたことについては、[イパーチイ年代記(3):注140]を参照。

141) 「礼拝所」(церем)とは、チェルニゴフの首座教会にある、オレーグ一族の靈廟のようなところと考えられる。

142) もし、これがイーゴリの守護聖人である聖ゲオルギオスの祭日に行われたとすれば、11月26日ということになる。この日付は、年代記記述の時系列とも合致する。



イジャスラフ [D112:I] は自分の弟のウラジーミル [D115] に言った。「弟よ、お前はハンガリー  
のわしの義弟である王とともにいた。お前はかれらの企てや思慮をすべて知っているだろう。  
弟よ、今、お前は、わしの名誉とおまえ自身の名誉のために、苦勞するときである」。こうして、  
イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ウラジーミル [D115] を、ハンガリーの王のもと、自分の  
義弟のもとに、支援〔を要請〕するために派遣した。ウラジーミル [D115] は、自分の兄イジャ  
スラフ [D112:I] に言った。「兄よ、わたしは、あなたの名誉のため、自分の兄弟のロスチスラ  
フ [D116:J] の名誉のためなら、苦勞ではありません。喜んで行きます」。

こうして、イジャスラフ [D112:I] は自分の弟ウラジーミル [D115] を、自分の義弟の王のも  
とに派遣して、つぎのように〔王に対して〕言わせた。「もし、〔ビザンティン〕皇帝が武力で〔そ  
なたを〕攻めてきたら、どのようになるかは、神の定めるところである。もし、そなたが自分  
で〔来ることが〕できなかつたら、先に自分でわしに言ったように、支援を送れ。ユーリイ [D17]、  
オレーグ一族、ガーリチ公を討つために、神が助けてくるだろう。兄弟よ、そなたにとっての  
侮辱は、そなたへの侮辱ではなく、わしにとっての侮辱である。もし、わしへの侮辱があれば、  
それはそなたへの侮辱である」。

王はこれを聞くと、ウラジーミル [D115] とともに1万の【409】良兵を、イジャスラフ [D112:I]  
のもとへと派遣した。これに先だつて、王およびウラジーミル [D115] から、その兄弟である  
イジャスラフ<sup>143)</sup> [D112:I]のもとへ、使者がやって来て、こう〔ウラジーミルの〕言葉を伝えた。  
「われらの義弟である王は、あなたに1万の兵を派遣し、つぎのように言いました。『あなたが  
侮辱を受けたその場所に、この部隊を送ります。自分の侮辱をはらすために、この部隊ととも  
に行軍して下さい。兄弟よ、さあ武装して進軍して下さい』と」。

ウラジーミル [D115] は、ハンガリーの部隊とともに、自分の兄のイジャスラフ [D112:I] の  
もとへやって来た。イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ウラジーミル [D115] およびハンガリー  
人と合流して、キエフへと軍を進めた<sup>144)</sup>。かれ〔イジャスラフ〕はまた、ヴァチエスラフ [D16]  
の家臣たち、ベレンディ人、キエフ人たちも召集した。そして、ベレソプニツァに到着した。

その時、ベレソプニツァには、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] がいた。イジャスラ

---

143) イパーチイ写本では、「ロスチスラフのもとへ」(Ростиславу)となっているが、文脈から判断して、  
フレーブニコフ写本の読み「イジャスラフのもとへ」(Изяславу)の読みを採用した。

144) マフノヴェツの注によれば、決定的な軍事行動は重要な祭日に開始されるのが伝統になっており、  
この場合には「受胎告知祭」すなわち1151年3月25日(この日は主日＝日曜日でもあった)にあ  
たると推定できる。さらに、イジャスラフの遠征のその後の展開を見ると、かれは短期間にキエフに  
到達して復活祭(1151年4月6日)の宴を張っており、この時系列の推定は蓋然性が高い[Літопис  
руський, 1989: С.235, прим. 11]。

フ [D112:I] は〔この城市に〕やってくる、ペレソプニツァの上流<sup>145)</sup>に陣取り、ザレチェスク<sup>146)</sup> (Зарѣчскъ) を焼いた<sup>147)</sup>。

そこで、かれ〔イジャスラフ〕に報告がもたらされた。ガーリチのウラジミルコ [A121] が、かれを討つべく進軍しているという。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞いて、自分の従士たちと評議を始めた。従士たちはイジャスラフ [D112:I] に、こう言い始めた。「公よ、ご存じのように、あなたには多くの困難があります。いま、ここに布陣して、戦いにおもむこうとしています。あなたは、ここに、ユーレイ [D17] を討つために来たのです。ところが、あなたの背後にウラジミルコ [A121] の軍がいます。あなたは、ユーレイ [D17] を討伐するために進軍して下さい。ここで〔われら〕は、合流してから、あなたのあとを追います。われらは、非常に苦勞するでしょう」。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の従士たちに言った。「そなたたちは、わしにしたがってルーシの地を出て、自分たちの〔所領の〕村、自分たちの財産を失ってしまった。わしはもはや、自分の祖父の地、父の地を蔑ろにすることはできない。それくらいなら、**[410]** 戦場に屍をさらそう。さもなくば、自分の父の地とそなたたちのすべての財産を力で取り戻すまでだ。ウラジミルコ [A121] がわしに追い付くかどうかについては、神の裁きを見ようではないか。神が、かれ〔ウラジミルコ〕とのことをどう裁くか、ユーレイ [D17] がわしを迎え討つかどうか、神の裁きを見ようではないか。神が、かれ〔ユーレイ〕とのことをどう裁くのか」。

そこから、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟のスヴァトボルク [D114] をウラジミルコへと派遣した。これは、ウラジミルコ [A121] を監視するためであった。そして、自分は、弟のウラジミル [D115]、自分の息子のムスチスラフ [II]、グロドノの〔公〕ボリス<sup>148)</sup> [F111]、ハンガリー人たちとともに、ドロゴブージへと軍を進めた。

ドロゴブージの住民は、十字架を手に城市から出てきて、拝礼をした。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は、かれら〔住民たち〕に言った。「そなたたちは、わしの祖父、わしの父〔の時代

145) ペレソプニツァは、ストゥブラ (Стубла) 川の右岸に位置していることから、南側にあたるこの川の上流を指すと考えられる。

146) 「ザレチェスク」 (Зарѣчскъ) は、ペレソプニツァから西南西に 20km に位置する城市。

147) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事によると、イジャスラフ [D112:I] はザレチェスクを焼いたあと、ミリスク (Мыльск) に向かい、そこで陣を張っている。

148) 当時のグロドノ公で、『イパーチイ年代記』では 6652(1144) 年の項の、オレーグ一族のウラジミルコ [A121] 討伐の遠征参加者として登場している。これまではキエフ大公の配下として行動してきたが、イジャスラフ [D112:I] とユーレイ [D17] の間の抗争の中で、前者と提携したと考えられる。

から]の民<sup>149)</sup>である。そなたたちに神の加護があるように」。

こうして、かれらと[十字架]接吻を行って、城内へ帰らせた。ドロゴブージの住民はかれ〔イジャスラフ〕に言った。「公よ、見よ、外国人のハンガリー人がそなたとともにいます。どうか、かれらが、われらの城市にいかなる悪もなさないようにしてください」。イジャスラフ [D112:I] は、かれら〔ドロゴブージの住民〕に言った。「わしはハンガリー人を、すべての地で率いているが、それは自分の民を害するためではない。わしにとって敵である者を討つべく率いているのだ。そなたたちは、何についても心配することはない」。

こう言うと、〔ドロゴブージを〕過ぎて、ゴルイニ川(Горина)を渡り、ホトリヤ<sup>150)</sup>川(Хотрь)で陣を張った。そして、そこからコレチェスク(Коречьск)へ向かって出発した。コレチェスクの住民は喜んで城市を出て、かれ〔イジャスラフ〕に拝礼した。イジャスラフ [D112:I] は、〔コレチェスクの〕城市を遠く過ぎると、スルチ川<sup>151)</sup>(Случь)まで行かず、手前の河岸に陣を張って野営した。

ガーリチ〔公〕のウラジミルコ [A121] は、アンドレイ [D173] に向けて<sup>152)</sup> **[411]**、ヴァシルコ・ヤロボルチ<sup>153)</sup>(Василко Ярополчич)を使者として派遣して「兄弟よ、わしのもとに来たれ」と言った。アンドレイ [D173] は、かれ〔ウラジミルコ [A121]〕のもとへと馬を駆けさせてやって来た。そして、ミレスク<sup>154)</sup>(Милеск)で、かれ〔ウラジミルコ〕と会合した。二人は、斥候部隊を先発させ、自分たちはその後から進軍した。

イジャスラフ [D112:I] のもとに報告がもたらされた。ガーリチ〔公〕のウラジミルコ [A121]

---

149) 文字どおりにとれば、イジャスラフ [D112:I] の父ムスチスラフ [D11] と祖父ウラジミル・モノマフ [D1] はキエフ大公のときに、キエフ公領に属するドロゴブージの支配公だったことを指している。

150) 「ホトリヤ」(Хотрь, Хотря) は、ゴルイニ川の右岸の支流の名前。

151) 「スルチ川」(Случь) は、ゴルイニ川右岸の支流の名前。

152) このとき、アンドレイ [D173] は、ベレソプニツァにいた。

153) この人物が誰であるかは不明。イジャスラフ [D112:I] の息子ヤロボルク [I3] の息子にヴァシーリイ [I31] という公が記録に残っているが、これを敵方であるウラジミルコの使者として同定するのは無理がある〔スズダリ年代記訳注 [III] 15 頁〕。ゴランンによれば、可能性があるのはモノマフの子ヤロボルク [D15] の息子であるが、かれに息子がいたことは知られていない。

154) 「ミレスク」(Милеск) は「ムイリスク」(Мыльск)とも表記し、ゴルイニ川の支流であるオスヴィツァ(Освица)川の河口に建設された城砦。ドロゴブージから南へ15kmほどゴルイニ川を上流にさかのぼったところにあった。ベレソプニツァからだ、南東へ直線で約20kmほどの距離にある。

とアンドレイ [D173], ウラジーミル・アンドレエヴィチ<sup>155)</sup> [D181] が, 大軍を率いてドロゴブージに近づき, ゴルニ川を渡ろうとしているというのである。

翌日の朝, イジャスラフ [D112:I] は起床すると, スルチ川を渡り, そこからチェルトフ森<sup>156)</sup>を横切ってウシェスク<sup>157)</sup>へと向かい, ウシェスクの近くでウシャ川<sup>158)</sup>(Уша)を渡河した。イジャスラフ [D112:I] のすべての部隊がウシャ川を渡ろうとしているとき, そこにガーリチ〔公〕のウラジミルコ [A121], アンドレイ [D173], ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] 配下の射手たちが, ウシャ川の岸壁の上に到着した。イジャスラフ [D112:I] は, これを聞くと, 配下の射手を派遣して戦わせた。川を挟んで戦闘が始まった。

イジャスラフ [D112:I] は, 軍を引いた。〔ウシェスクの〕城市の手前に小川があった。そこで, かれ〔イジャスラフ〕は, 自分の弟ウラジーミル [D115], 自分の息子のムスチスラフ [I1] とともに, 戦闘準備を行い, その小川の岸に布陣した。イジャスラフ [D112:I] の射手たちは, 押し寄せて対岸に渡った。ガーリチ人〔の兵〕もこちらの岸に渡った。

そこで, イジャスラフ [D112:I] の射手たちは, ひとりのガーリチ人の家臣を捕虜に獲り, これをイジャスラフ [D112:I] のところに引き立てて行った。イジャスラフ [D112:I] は, かれに尋問して「お前の公<sup>159)</sup>はどこにいるのか」と言った。かれ〔捕虜の家臣〕は言った。「ほら, 城市の向こうに最初の森があります。そこで, 〔公は〕あなたについての情報を得て **[412]**, そこで陣を張っています。しかし〔公は〕敢えて, 森を通り抜けて進軍しようはしません。かれ〔公〕はこう言っていました。『もしわれらが森を通り抜けて進めば, かれらはわれらと戦闘になる。しかし, われらの軍勢は遠く背後にある。ここで待とうではないか』と」。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと, 自分の弟ウラジーミル [D115], 自分の息子ムスチスラフ [I1], 自分のすべての従士たちに向かって「かれ〔ウラジミルコ [A121]〕を討つべく再度進軍しよう<sup>160)</sup>」と言った。

155) ウラジーミル [D181] は, アンドレイ善良公 [D18] の息子で, 1149年8月のペレヤスラヴリ郊外でのイジャスラフ [D112:I] の決定的敗戦の際には, イジャスラフの息子ムスチスラフ [I1] とともに, かれの陣営に身を置いていた。それが, ここでは, イジャスラフに対抗する, ウラジミルコ [A121] = アンドレイ [D173] 連合に加わっているのは不思議である。かれは, この年にドロゴブージの公であったことから, 先のイジャスラフ [D112:I] の進軍でドロゴブージを追われ, 反対陣営に加わったものか。なお, タティーシチェフは, ウラジミルコから援軍要請を受けたアンドレイは, ブジェスキイ (Бужеский; Божеский) の公だったウラジーミル [D181] に使者を遣って示し合わせ, とともにミレスクに駆けつけた [Татищев Т. III, 1995: С. 23], としているが, 典拠が不明で, 距離も遠すぎ, 疑わしい。

156) 本稿注 114 を参照。

157) 本稿注 75 を参照。

158) ドニエプル右岸の支流で, 現在のウシ (Уж) 川のこと。渡河したのは最上流の地点と考えられる。

159) ガーリチ公のウラジミルコ [A121] を指している。

160) イジャスラフの思惑は, ウラジミルコが本隊から離れ小勢で森の中に待機している間に, これを攻め滅ぼそうとしたのである。

すると、従士たちがかれ〔イジャスラフ〕に言った。「公よ、あなたは、かれ〔ウラジミルコ〕を討つために進軍してはなりません。見よ、あなたの前に川があります。さらに悪いことがあります。どうして、かれを討ちに馬を進められるものでしょうか。さらに、かれは森の中に隠れて陣を張っているのですから。公よ、今はそれを行わず、キエフへ、自分の従士たちのところへと馬を進めなさい。もし、ウラジミルコ [A121] がわれらに追い付くことがあれば、そこで、われらは戦いましょう。あなたは、ザレチェスクで『もし、ユーリイ [D17] がわれらを迎え撃とうとするのなら、これと戦おう』と言ったではありませんか。公よ、今は、時を逸することなく、出発されよ。もし、そなたがテテレフ(Тетерев)川に着いたら、あなたの従士たちはすべて、その、あなたのもとへ駆けつけるでしょう。あなたがどうなるかは、神の御意のままです。かれら〔ウラジミルコ [A121] の連合軍〕より前に、そなたがベルゴロドに到着するかどうか、より多くの従士たちが、あなたのとこに駆けつけて、多くの軍勢を持つことになるのかは〔すべて神の御意のままです〕」。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の兄弟たちの言うことを聞いて、〔さらに先へと〕進軍した。

イジャスラフ [D112:I] はそこから進み、スヴァトスラヴリヤ・クリニツァ<sup>161)</sup> (Святославля Криниця) で陣を張った。他方、ウラジミルコ [A121] は、ウシャ川を渡ってから、その場で陣を張った。こうして、双方は相対して布陣した。イジャスラフ [A121] の斥候がガーリチ勢の焚き火を認め、ガーリチ側の斥候がイジャスラフ [A121] 勢の焚き火を認められるほど〔の距離〕だった<sup>162)</sup>。【413】

イジャスラフ [D112:I] は、自分の従士たちとともに、夜にミチェスク<sup>163)</sup> (Мичьск) に進軍することを計画し、そして、自分のすべての兵に向かって、大量の火を焚くように命令を発し始めた<sup>164)</sup>。こうして、火が焚かれたが、自分たちは、夜陰に紛れてミチェスクへと進軍を開始した。そこで、従士たちは、テテレフ川河岸に布陣して〔待機して〕いた大軍と出遭うことができた。そこで、〔従士たちは〕イジャスラフ [D112:I] に拝礼した。ミチェスクの住民は、かれら〔従士たち〕とともに「あなたがわれらの公です」と言った。

---

161) 「スヴァトスラヴリヤ・クリニツァ」(Святославля Криниця) はテテレフ川左岸の地名(泉が湧いていた)で、現在はウクライナのリシフシチナ(Лісівщина)村とコヴァリ(Ковалі)の村の間にある。ウシェフスクからは、南東へ約 27km の場所に位置している。

162) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「イジャスラフは、ウラジミルコが兵をとめない、自分を追って進軍していることを知り、夜の間に身を隠して、キエフに向かった」とある。〔スズグリ年代記訳注 [III] : 15～16 頁〕

163) 「ミチェスク」(Мичьск, Мычеськ) は、テテレフ(Тетерев)川とムイカ川(Мыка)の合流地点に建てられた城砦で、現在のラドムイシリ(Радомишль)に相当する。キエフからだと、西方に約 90km、ウシェフスクからだと、南東に約 80km の地点にある。

164) イジャスラフは、火を盛んに焚くことで、この場所で野営をするかのように見せかけたのである。

イジャスラフ [D112:I] はそこからテテレフ川を越え、対岸で休息するために馬から降りた。そこで昼食をとり、馬を休ませると、ズドヴィジェニ<sup>165)</sup> (Въздвигдънь) へ向かって出発し、ズドヴィジェニに到着すると、夕方までに陣を張った<sup>166)</sup>。それから、乗馬して、弟のウラジミル [D115] と自分の息子ムスチスラフ [I1], グロドノのボリス [F111] を自分のもとに呼び寄せた。ハンガリー人の指揮官たちも合議にやってきた。かれ〔イジャスラフ〕はかれら〔集まった者たち〕に次のように言った。

「見よ、ウラジミルコ [A121] がわれらを追って進軍している。われらは、ここで陣にとどまっている。兄弟たちよ、そなたたちに言う。われらはさらにとどまるか、それとも自分たちの困難を避けて<sup>167)</sup>、今夜、出発することにするか。もし、われらが一夜をここにとどまれば、ウラジミルコ [A121] はわれらの背後に迫るだろう。かれがわれらに追い付くだけではない、別の軍勢のユーリイ [D17] がわれらの前方にいるのだ。やはり、かれ〔ユーリイ〕を待つようなことになる、兄弟よ、われらは困難になるだろう。しかし、そのつもりがあるのなら、神を見て〔望みをかけながら〕、自分たちの困難を避けて、進軍しようではないか。もしわれらが、ベルゴロドへと入城しようとするのなら、ユーリイ [D17] は、**[414]** われらを前にして逃走する構えを見せるだろう。そして、われらは自分の〔城市〕キエフへと進軍しよう。キエフの強力な〔市民軍の〕部隊のもとへと行くのだ。かれら〔部隊〕のもとにさえ行けば、かれらはわしの味方となって戦ってくれることを、わしは知っている<sup>168)</sup>。かりに、われらがベルゴロドへと進軍できない場合には、黒頭巾族のもとへ行こう。かれらと合流して、神に望みをかけよう。そうすれば、われらは、ユーリイ [D17] も、ウラジミルコ [A121] も恐れるものではない」。

すると、ハンガリー人が、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕に言った。「われらは、そなたの客分である。もし、そなたがキエフ人に〔味方をしてくれるという〕期待を持っているのなら、そなた自身の家来や、われらが乗っている馬については、そなたがよく知っているはずである

165) 「ズドヴィジェニ」(Въздвигдънь; Здвигдънь) は、テテレフ川右岸の支流で、ズドヴィジェニ (Здвигдънь) 川 (現在のズドヴィジ川 (Здвиж)) 上流の河岸にある城砦。現在のズドヴィジカ村 (Здвижка) に相当する。ミチェスクからだと、南南東に約 28km の地点に位置している。

166) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ウラジミルコの斥候がロシ川のところで、かれ〔イジャスラフ〕に追い付いたが、ウラジミルコとアンドレイは間に合わなかった。その後イジャスラフは、砦を越えて進んだ」[スズダリ年代記訳注 [III]: 16 頁] という新しい情報がある。これが本当であれば、イジャスラフ軍はズドヴィジェニからロシ川まで南下して、大きく迂回してから北上してキエフに向かったことになる。この行路は、以下の記述に見るように、イジャスラフがロシ川周辺の黒頭巾族のもとに、援軍を得るために行ったと考えれば、理解することができる。

167) 「困難を避けて」(труда не правяче) は、ここでは、ウラジミルコと戦わずにとということ。ウラジミルコの大軍と戦うことは、危険で困難だということがふまえられている。

168) 1149 年 8 月末に、ペレヤスラヴリ郊外の戦いで敗れ、ウラジミルに逃れる直前のイジャスラフに対して語られたキエフ人の言葉がふまえられている。[イパーチイ年代記 3: 387 頁] 参照。



〔からよいだらう〕。公よ、味方が来ることは善いことである。もし、戦力が回復するのなら、今夜、神がわれらに定めるように、進軍しようではないか。』

イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ウラジーミル [D115] に言った。「そなたは、先行してベルゴロドに行け。われらはみな、自分たちの下級従士たちを、そなたに付けて行かせよう。さあ、先にベルゴロドへ行け、われらは、そなたの後から行こう。ベルゴロドに到着し、〔敵が〕そなたと戦闘を始めたときには、そなたは、われらに使者を派遣せよ。そして、自分自身は朝から昼〔食〕まで戦え。わしは、オブラムリ<sup>169)</sup> (Обрамль) 橋を渡るか、もしくは、黒頭巾族のもとへ行って、また黒頭巾族と合流して、ユーリイ [D17] を討つべくキエフへと進軍するだろう<sup>170)</sup>。もし、そなたがベルゴロドへ到着し、そのことを使者によってわれらに知らせたならば、われらは、そなたのところへ **[415]** 行くだらう。』

イジャスラフ [D112:I] は、乗馬すると、ズドヴィージェニ川 (Въздвидень) を渡り、そこで自分の部隊を武装させ、自分の弟のウラジーミル [D115] を、ベルゴロドへと先行して派遣した。そして自分は、自分の部隊とともに、かれのあとから進軍した。

ウラジーミル [D115] は、ベルゴロドにやって来ると、橋のある場所も渡渉で渡った<sup>171)</sup>。

その時、ボリス [D170] は、ベルゴロド城内の階上の間で自分の従士たち、ベルゴロドの司祭たちと宴を張っていた。もし、関所の官吏が警備を怠り、跳ね橋を上げていなかったとしたら、かれら〔ボリスと従士、司祭たち〕は捕らえられていたことだろう。

さて、〔ウラジーミル [D115] の〕部隊が橋のところにやって来て喊声を上げ、喇叭を吹き鳴らした。ボリス [D170] はこれを聞くと、ベルゴロドから逃げ出した。ベルゴロド人は、一団となって橋へ向かって駆けつけ、〔ウラジーミル [D115] に向かって〕拝礼をすると、こう言った。「公よ、追いかちなさい。ボリス [D170] は、そなたから逃げ出しました」。そして、速やかに橋が架けられた。

ウラジーミル [D115] はベルゴロドに入城し、自分の兄のイジャスラフ [D112:I] へ使者を遣って、こう言った。「わたしはベルゴロドに入城しました。ボリス [D170] は城から逃げました。ボリス [D170] の消息も、ユーリイ [D17] の消息も分かりません。速やかに来て下さい」。

イジャスラフは、速やかにベルゴロドのかれ〔ウラジーミル〕のもとへやって来ると、配

---

169) 「オブラムリ」(Обрамль) は、ズドヴィージェニ川下流に架かっていた橋で、現在のズドヴィジ川河岸のアブラミウカ (Абрамівка) 村の場所に相当する。ミチェフスク (現在のラドムイシリ) からだと北東へ 66km ほど離れた位置になり、ここを通過した場合には、北からキエフを攻撃する遠征路となる。

170) 前注 166 にあるように、実際はイジャスラフの部隊は、南下してロシ川まで行って、そこで黒頭巾族に援軍を求めてからキエフに向かう、後者の選択をしたことになる。

171) ベルゴロドのボリス [D170] の軍勢に気付かれなくするための。

下の<sup>172)</sup>部隊に、夜明けまでに橋を渡って渡河するように命じた。イジャスラフ [D112:I] 自身は、自分の部隊を武装させ、ハンガリー人とともにキエフへと進軍した。自分の弟ウラジミル [D115] は、その部隊とともにベルゴロドに留まらせた。これは、ガーリチのウラジミルコ [A121] [のキエフへの進軍を阻止する] ためだった。

ボリス [D170] は、自分の父ユーレイ [D17] のもとへと駆けつけた。そのとき、ユーレイ [D17] はクラスヌイ館<sup>173)</sup> **[416]** にいた。ボリス [D170] は自分の父に、イジャスラフ [D112:I] のことを告げて「軍勢が迫っています」と言った。ユーレイ [D17] はこれを聞くと、いかにしても救われる手段はなく、小舟に乗船して、〔ドニエプル川の〕対岸へと逃げ、ゴロドク<sup>174)</sup> へと逃れた<sup>175)</sup>。

キエフ人たちはイジャスラフ [D112:I] が来たことを聞き知ると、城を出て、喜んで歓迎した。イジャスラフ [D112:I] は、キエフの自分の祖父、自分の父の公座に、大いなる名誉をもって座した。キエフでは、ユーレイ [D17] の従士の多くが捕らえられた。

イジャスラフ [D112:I] は、聖ソフィア教会を出て、自分の兄弟たちとともにヤロスラフの館へ向かった。かれはハンガリー人たちを昼食に呼んだ。キエフ人も呼んだ。こうして、大いなるヤロスラフの館でかれらとともに昼食をとると、大いなる祝宴を催した。そのとき、ハンガリー人たちは、ヤロスラフの館で、たくさんの者が馬に乗って飛び跳ねたて見せた。キエフ人は、多くのハンガリー人がおり、その兵士も馬も多いことに驚いた。

ウラジミルコ [A121] は、アンドレイ [D173] とともにいて、このような事態を知らなかった。二人はミチェフスクで陣を構えたあと、斥候を派遣して、ユーレイ [D17] がすでにゴロドクにおり、イジャスラフ [D112:I] がキエフにいることを知った。

172) 写本によってはここに「ハンガリー人の」の語が付け加えられている。

173) 「クラスヌイ館」(Красный дворъ) は、キエフの丘の南の森の中、ミハイル・ヴィドピツキ修道院の隣にあったと想定される公の屋敷のこと。そこからすぐに、ドニエプル河岸の船渡し場に出ることができた。1158年にユーレイがキエフで死去すると、クラスヌイ館は市民の手でたちまち掠奪に遭っている [ПСРЛ Т.2, 1908: Стб. 489]。そのことから見て、この館はおそらくキエフにおけるユーレイの拠点の建物だったことが分かる。

174) オステル川河口のゴロドクのこと。ここが、ユーレイ [D17] にとって、拠点城市になっていたことが分かる。

175) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ユーレイはキエフ人たちを恐れた。なぜなら、イジャスラフとその弟に寝返っていたからである。ユーレイはキエフを出て、ゴロデツへ行った」と、逃走の理由を説明している。

ガーリチのウラジミルコ [A121] は、イジャスラフ [D112:I] がキエフに入城したこと、ユーリイ [D17] がキエフから逃げ出したことを聞いた。ウラジミルコ [A121] は、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] とウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] に言った。

「わが姻戚〔ユーリイ〕の公支配の、なんという〔ひどい〕ことか。かれ〔ユーリイ〕を討伐する〔イジャスラフの〕遠征はヴラジミルから発したのだぞ。なぜ、あの者〔イジャスラフ〕のこと〔動き〕を察知することができなかったのか。息子よ、そなたは<sup>176)</sup>ペレソプニツァに座していたではないか。別の〔息子は〕<sup>177)</sup>【417】ベルゴロドに座していたではないか。なぜかの者〔イジャスラフ〕を待ち伏せて討つことができなかったのか」。

そして、〔ウラジミルコは〕怒りを含んで、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] に言った。「そなたは、自分の父親と一緒に〔同じ場所で〕公として支配するがよい、自分たちだけで統治を行うのだ。わしは、ひとりで、イジャスラフ [D112:I] 討伐の軍を進めることはできない。昨日、イジャスラフ [D112:I] は、わしと戦おうとしたが、かれはそなたの父を討つべく進軍して、わしと戦うように見せかけて、わしの面前から転回して行った。今となって、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕がすべてのルーシの地へ入ったからには<sup>178)</sup>、わしはひとりでかれを討つために軍を進めることはできない」。

〔ウラジミルコは〕こう言うと、ガーリチへの帰路をとった。かれはまたミチェスクの住民にこう言った。「わしに銀を差し出せ。さもないと、わしの思うがままに、そなたたちを捕虜にとって〔売り払うぞ〕<sup>179)</sup>。かれら〔ミチェスクの住民〕は、かれらに要求されているものを持っていなかった。かれらは、耳や首から〔装飾品を〕取って、溶かして銀塊にして、これをウラジミルコ [A121] に差し出した。ウラジミルコ [A121] は銀を受け取ると出発した。このようにして、かれは自分の土地に至るまでのすべての城市から銀を受け取った。

〔ウラジミルコ〕は、アンドレイ [D173] とウラジーミル [D181] に対して「お前たちは自分の父親のところに行くがよい<sup>180)</sup>」と言った。アンドレイ [D173] とウラジーミル [D181] は、プ

---

176) アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] を指している。

177) ボリス・ユーリエヴィチ [D170] を指している。

178) イジャスラフ [D112:I] が、キエフの公座に就いたことは、そのまま「すべてのルーシの地」への命令権を得たという考え方に基づくのだろう。

179) ミチェスクの住民は、イジャスラフ [D112:I] 軍を迎え入れたが、その後、ウラジミルコとアンドレイ等の軍に占領され、かれらはここに陣営を張っていた。ウラジミルコの要求は、ミチェスクの住民の〈裏切り〉に対する報復の意味があったのだろう。

180) 1150年の秋にアンドレイ [D173] は、父ユーリイからペレソプニツァ、トゥーロフ、ピンスクを与えられ、ウラジーミル [D181] もおそらく、ユーリイの〈息子〉として、アンドレイとともにこれらの城市の一つの座に就いていたのだろう。ウラジミルコ [A121] による追撃の遠征に同行したかれらは、父ユーリイがキエフの公座を失った後は、これらの諸城市に戻ることは不可能(危険)であった。そのため、ウラジミルコは、父ユーリイのいる、ゴロドクへ行くよう二人に言ったのである。

リピャチ川の河口のダヴィドヴァ・ボジェンカ<sup>181)</sup> (Давыдова Боженка) まで行き、そこからオステルスキイ・ゴロドクの自分たちの父ユーレイ [D17] のもとへと行った<sup>182)</sup>。

翌日、イジャスラフ [D112:I] は、ヴィシエゴロドの自分の父ヴァチェスラフ [D16] のもとに使いを遣って、かれに言った。「父よ、あなたに拝礼します。神がわたしの父ムスチスラフ [D11] をお召しになってしまった今、あなたはわたしの父であります。あなたに礼拝します。最初、わたしは罪を犯しました。【418】これについては悔い改めます。しかし、再度〔罪を犯しました〕。それは〔最初は〕神がわたしに、キエフにおいてイーゴリ [C42] に勝たせてくれた時のことでした<sup>183)</sup>。しかし、わたしはあなたにしかるべき名誉を払いませんでした、それは〔再度は〕トゥマシチ (Тумаш) でのことでした<sup>184)</sup>。今、父よ、これらすべてのことを神の前で、あなたの前で悔い改めます。どうか、父よ、わたしを赦して下さい。そうすれば、神もわたしを赦してくれるでしょう。父よ、今はあなたにキエフを引き渡します。どうか、〔キエフに〕行って自身の祖父、自身の父の公座に座して下さい」。

ヴァチェスラフ [D16] は、こう〔答えて〕言った。「息子よ、神の助けがそなたにあるように。そなたがわしに名誉を払ったことに対して。もし、そなたが最前からそのようにしていたのなら、そなたはわしの名誉を尊ぶこととなり、神の名誉を尊ぶことになったものを。見よ、まさにそなたは『あなたはわたしの父です』と語った。そなたは、わしの息子である。そなたには父がなく、わしに息子はいる。そなたこそわしの息子であり、そなたこそわしの兄弟なのだ」。

このことについて、二人は尊い十字架に接吻して〔誓った〕。善きことについても、悪しき

181) 「ダヴィドヴァ・ボジェンカ」(Давыдова Боженка) は、文字どおりの意味は「ダヴィドの礼拝所」で、ダヴィド (スヴァトスラヴィチ [C3] か?) が礼拝所を建てた場所と理解できる。『イパーチイ年代記』1161年の記事にも、イジャスラフが「ボジェンカ」でドニエプルを渡河したという記録があり、ここが渡し場になっていたことは疑いない。正確に特定はできないが、プリピャチ河口付近のドニエプル川右岸にそのような渡河地点があったのだろう。次注 182) の『ラヴレンチイ年代記』に記されている「ヴォロヴィチ」と同じ場所を指す可能性もある。

182) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「〔アンドレイは〕ヴォロヴィチで (на Воровичѣ) ドニエプル川を渡り、そしてゴロドクへ向かった」とある。この「ヴォロヴィチ」について、マホヴェツは、プリピャチ川河口に近いドニエプル左岸にある、ボロヴィキ (Боровики) 村 (チェルニゴフから南西方向に約 45km) に同定している。[Покажчики]。

183) 1146年8月に、イジャスラフ軍がキエフ公だったイーゴリを破ってキエフを占拠したとき、ヴァチェスラフは最年長者であることを理由にヴラジミルなどを占拠した。これに対して、イジャスラフは年長者に敬意を払わず、ヴァチェスラフを制圧して、その拠点都市トゥーロフを取り上げた ([『イパーチイ年代記』(2): 348頁, 注 373を参照)。イジャスラフは、この一連の事態について反省をしている。

184) 1150年8月後半に、イジャスラフは、オルシャニツァ川の戦いでヴラジミルコ軍に敗北してキエフに戻ったあと、ヴァチェスラフをキエフからヴィシエゴロドに退去させ、自分はヴラジミルに逃げている。その敗北と、ヴァチェスラフをキエフの公座に残せなかったことについて言っている。注 110 参照。

ことについても二人は別れず、一つの場所にあることを。

この年ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] が、ペレヤスラヴリで逝去した。聖金曜日<sup>185)</sup>の未明のことだった。兄弟たち、すなわちアンドレイ [D173]、グレーブ [D178]、ムスチスラフ [D17A] が、聖ミハイル教会の、かれらの父方の叔父アンドレイ<sup>186)</sup> [D18] とスヴァトスラフ<sup>187)</sup> [D13] の〔墓の〕傍らに、〔ロスチスラフを〕埋葬した。

6659 [1151] 年

イジャスラフ [D112:I] は、自分の父方の叔父で自分の父であるヴァチェスラフ [D16] を〔ヴィシェゴロドから〕キエフに招来した。ヴァチェスラフ [D16] はキエフに入城し、聖ソフィア教会に行き、自分の祖父と父の公座に座した。

そして、かれ〔ヴァチェスラフ〕は、自分の息子のイジャスラフ [D112:I] を【419】昼食に招いた<sup>188)</sup>。また、すべてのキエフ人、王の家臣たち、ハンガリー人、その従士たち〔も招いた〕。かれらは、大いなる友愛を分かち合った。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、ハンガリー人たちに大いなる名誉を施した。ヴァチェスラフ [D16] は自分から、イジャスラフ [D112:I] も自分から、それぞれが、多くの贈物を与えた。それは、器物、布帛、馬匹、絹織物など、あらゆる贈物だった。

そのとき報告がもたらされた。ガーリチのウラジミルコ [A121] が、ガーリチに戻り、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] とウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の二人が、かれ〔ウラジミルコ〕のところから、プリピャチ川河口のダヴィドヴァ・ボジェンカへと、自分の父のところへ行くために向かっているというのである。

その翌日、ヴァチェスラフ [D16] は、イジャスラフ [D112:I] に使者を遣って、かれにこう言った。「息子よ、神がそなたを助けるように。そなたは、わしに自分の父にするように名誉を施した。そこで、息子よ、わしはそなたに言う。わしはすでに老いた。すべての約定を結ぶことはわしにはできない。二人でキエフにいることにしよう。もし、われらが、キリスト教徒を相

---

185) 1151年4月6日に相当する。その場合、この記事は、6659(1151)年の年紀のすぐあとにあるべきだが(実際に『ラヴレンチイ年代記』の並行記事はそうになっている)、『イパーチイ年代記』では、6658(1150)年の記事の最後に付加されている。編集作業上の誤認によるものか。

186) アンドレイ [D18] が、1142年1月22日にミハイル教会に埋葬されたことについては、[イパーチイ年代記(2): 324頁, 注217]を参照。

187) スヴァトスラフ [D13] が、1114年3月16日にミハイル教会に埋葬されたことについては、[イパーチイ年代記(1): 255頁, 注71]を参照。

188) 復活祭(1151年4月8日)を祝う昼食と考えるのが、時系列的に見て合理的と思われる。

手に、あるいは邪教徒を相手に、なんらかの約定をするときには<sup>189)</sup>、二人で同じ場所に行こうではないか。〔それができない場合には〕わしの従士たち、わしの部隊は、二人のものなのだから、そなたが約定をせよ。もし、二人で行くことができる場所であれば、二人で行こうではないか。そうでない場合には、そなたが、わしの部隊と自分の部隊を率いて行くがよい。

イジャスラフ [D112:I] は、大いなる喜びと大いなる名誉をもって、自分の父に拝礼して言った。【420】「父よ、あなたに拝礼します。どうか、われら二人が言ったことは、神が同じ場所で実現させてくれますように。われら二人が生きている限りは」。

三日目<sup>190)</sup>に、二人〔イジャスラフとヴァチェスラフ〕は、ハンガリー人を呼び寄せると、かれらにハンガリーへの帰国を準備させて、こう言った。

「自らの王のもとに、われらの義弟<sup>191)</sup>のもとに行くがよい。われら二人は、そなたたちの後から、わが息子ムスチスラフ [II] を派遣しよう。また、王に対しては次のように言おう。『そなたに神の加護があるように。兄弟よ、そなたがわれらを助けてくれたことは、実の兄弟に対して、あるいは息子が父に対してのみ出来ることであり、それをそなたは、われら二人になしてくれたのだ。兄弟よ、われら二人は、再度そなたに言う。そなたのもとに、わが息子ムスチスラフ [II] を派遣して、言葉を伝えよう』。このように言うと、二人は、かれら〔ハンガリー人〕を、大いなる名誉をもって、ハンガリーの王のもとへと退去させた<sup>192)</sup>。

その後、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、同じ場所に会合して、自分の息子ムスチスラフ [II] に、ハンガリーの王のもとへ行く準備をさせ、王に対しては次のような言葉を〔托した〕。

「そなたがわれら二人になしたことは、実の兄弟がその兄弟に、あるいは息子が父に対して出来ることであり、そのように、そなたはわれら二人を助けてくれた。兄弟よ、われらはこう言おう。『どうか、いかなることがあろうと、神がわれらとそなたを引き離すことがないように。もし、そなたが侮辱を受けることがあれば、そなたの侮辱をはらすため、神の赦しを得て、わ

189) キリスト教徒あるいは邪教徒と「約定を結ぶ」(ряд, рядити)とは、具体的には、掠奪や戦争を行ったあとに相手と交渉して和議を結び、これを固める誓約の儀式(十字架接吻)を行う一連の行為を指している。諸公の掠奪や戦争は消耗戦でないため、かならずこの「約定」が伴い、これは公にとって重要な仕事だった。

190) この「三日目」は、ヴァチェスラフがキエフの公位に就いた日(6659(1151)年の年紀が始まった日)から起算している。上注188のように、この日が復活祭(1151年4月8日)とすれば、「三日目」は4月10日に相当し、この日には、以下に述べられる、ムスチスラフ [II] のハンガリー行き準備、ロスチスラフ [D116:J] への使者の派遣が行われたと考えられる。

191) 「義弟」は зять で、ゲーザ二世のこと。本稿注12も参照。

192) まだ、ユーリイの反攻が当然予想されるこの段階で、主要な軍勢力であるハンガリー人を帰国させたのは不思議である。キエフ人からの苦情が多く出たということか。



れらは自身がその場所に〔駆けつけるだろう〕。もしくは、われらの兄弟を、息子たちや部隊を〔派遣するであろう〕。われら二人がそなたに報いることができるのは、**[421]** われら自身の生命を賭けるほかないのだから。そなたが、われら二人になしてくれたように』。

今は、自分自身の事業をなすがよい<sup>193)</sup>。皇帝がそなたと戦おうとしているときに、われらはそなたを呼ぶようなことはしない。ただ、どうか再び、同様の援軍を派遣してほしい。われらのもとに、強力な〔軍隊を〕、〔そなたの兄弟〕であり、われら二人の息子であるムスチスラフ [I1]〔が戻るときに〕に同行させて、派遣してほしい。なぜなら、ユーリイ [D17]は強く、ダヴィド [C3]一族<sup>194)</sup>、オレーグ [C4]一族<sup>195)</sup>〔の諸公〕がかれの味方になっているからである。また、原野のポロヴェツ人もかれの味方である。かれ〔ユーリイ〕は黄金を使って、かれら〔ポロヴェツ人〕を味方に引き入れているのだ。兄弟よ、今は、この春<sup>196)</sup>にわれらを助けよ。もし、この春にわれらに戦闘がない場合には、われらは自分たちの部隊を率いて、そなたを助けに行こう。そうではなく、そなたが皇帝と話を付けたときには、われらに援助をして欲しい。神がわれらを助けたことについて、また黒頭巾族がわれらのために、すべてのルーシの地を獲得してくれたことについては、すべて、そなたの家臣たちとそなたの兄弟ムスチスラフ [I1]が、そなたに語るだろう』。

こうして、二人〔ヴァチェスラフとイジャスラフ〕は、ムスチスラフ [I1]にハンガリー行きの準備をさせると、さらに、自分の家臣たちを、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J]のもとへと行かせた。

ヴァチェスラフ [D16]は、ロスチスラフ [D116:J]に〔使者を通じて〕こう言った。「見よ、兄弟よ、神はそなたの兄であり、わしの息子であるイジャスラフ [D112:I]を、わしと同じ場所に集めて下さった。そして、再びルーシの地を獲得し、わしに名誉を施して、わしをキエフ〔の公座〕に据えた。息子よ、**[422]** わしは、息子であるそなたに願う。そなたの兄であるイジャスラフ [D112:I]が、わしにとって息子であるように、そなたもわしにとって〔息子で〕あって欲しい。また、わしはそなたに願う。息子よ、労を厭わず、ここに、われら二人のもとに来られよ。われらは、神がわれらに顕すことを同じ場所で見ようではないか<sup>197)</sup>」。

また、イジャスラフ [D112:I]は、自分の弟のロスチスラフ [D116:J]に〔使者を通じて〕言っ

193) ハンガリー王ゲーザ二世は、ビザンティン皇帝であるマヌイル一世との戦闘に集中せよ、ということ。

194) ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]を指している。

195) スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]とその甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]を指している。

196) この時点がすでに「春」(1151年4月上旬)であることから、速やかに援軍を派遣して欲しいという含意がある。

197) この表現については、[イパーチイ年代記(3):358頁、注154]、及び本稿注24を参照。

た。「兄弟よ、そなたは、自分の〔父方の〕叔父にして父なる方〔ヴァチエスラフ〕に名誉を施すよう、わしに何度も強く要請してきた。見よ、今、神はわしをルーシの地に導き、わしはキエフにおいて、わしとそなたの叔父〔ヴァチエスラフ〕を〔キエフ公として〕得ることができた。これは、そなたのためであり、ルーシの地全体のためでもある。兄弟よ、わしは、再び願う。かの地、ノヴゴロドには、神の御心によって、そなたにとっても息子であるわしの息子ヤロスラフ<sup>198)</sup> [I2] がおり、かの地、スモレンスクにはそなたがいる。兄弟よ、これらの地の〔秩序を〕すべて定めて、ここへと来られよ。われらは、神がわれらに顕すことを同じ場所で見ようではないか」。

ユーレイ [D17] は、チェルニゴフのウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ<sup>199)</sup> [C43] に使者を遣って、次のように言った。「見よ、すでにイジャスラフ [D112:I] はキエフにいる。そなたたち二人は、わしを助けるために来たれ」。

スヴァトスラフ [C43] は、復活祭を待たずに、受難週間の月曜日<sup>200)</sup> に出発した。さて、火曜日<sup>201)</sup> には、かれに息子が生まれ、洗礼名をユーレイ、世俗の名をイーゴリ<sup>202)</sup> [C432] と命名した。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は、復活祭<sup>203)</sup> の祝日はプレストヴィト<sup>204)</sup> (Блестовѣтъ) で奉事を行い、そこから、チェルニゴフへと向かった。そして、自分の兄弟ウラジーミル [C34] と **[423]** 合流して、そこから二人は船で、ゴロドクのユーレイ [D17] のもとへと向かった。

そのとき、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、キエフのヴァチエスラフ [D16] および

---

198) ヤロスラフ [I2] は、1148 年秋から 1154 年 3 月まで、ノヴゴロドの公座に就いていた。

199) 当時、スヴァトスラフ [C43] はノヴゴロド・セヴェルスキイに公として座していた。

200) 受難週間とは復活祭の前の一週間のこと。この年 1151 年の受難週間は 4 月 2 日～4 月 7 日で、その月曜日は 4 月 2 日に当たる。

201) 1151 年 4 月 3 日に相当する。

202) このイーゴリ＝ユーレイは、成長してのちにノヴゴロド・セヴェルスキイ公として、『イーゴリ軍記』に描かれることになる人物である。イーゴリの母親（つまり、スヴァトスラフ [C43] の妻）はノヴゴロド市長官ペトリラの娘である。スヴァトスラフがノヴゴロド公であった 1136 年に結婚している。

203) 1151 年 4 月 8 日が復活祭に相当する。

204) プレストヴィト (Блестовит) は、プールカ (Пулка) 川 (デスナ川右岸支流) の右岸にあった城砦で、現在のプリストヴァ (Блистова) 村に相当する。チェルニゴフからだと、東南東に約 44km 離れている。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] のところに向かっているところだった<sup>205)</sup>。かれら〔三人〕は、ゴロドク (Городок)<sup>206)</sup>〔・ペソチニイ〕で宿営を張って、そこでゲオルギオスの日<sup>207)</sup>を祝った。

その時、ロスチスラフ [D116:J] が、スモレンスク人の多数の兵を率いて〔キエフの〕自分の〔父方の〕叔父ヴァチェスラフ [D16] と自分の兄イジャスラフ [D112:I] のもとへとやって来た。ヴァチェスラフ [D16] は、自分の甥であるロスチスラフ [D116:J] を、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟〔ある〔ロスチスラフ [D116:J]〕を見て、ともに大変に喜んだ。そして、神とそのいとも淨き聖母、生命を与える十字架の力を讚美した。かれらは、大いなる宴を張り、大いに親愛を深めた。

ユーリイ [D17] はキエフへ向けて進軍を開始して、ロドゥーニヤ<sup>208)</sup> (Родунія) で陣を張った。多くの原野のポロヴェツ人が、ユーリイ [D17] を助けるためにやって来た<sup>209)</sup>。

イジャスラフ [D112:I] は〔敵が〕ドニエプル川を渡渉しないように警戒をしていた。こうして、ドニエプル川の両岸で、小舟に乗って戦いが始まった。それは、キエフからほとんどデス

---

205) イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、この直前までユーリイ [D17] の陣営に加わっていたことから、この記述によって、イジャスラフ [C35] は立場を転向して、イジャスラフ＝ヴァチェスラフ陣営に加わるためにキエフ方面へと向かったことが分かる。1147年の記事で、イジャスラフ [C35] はスタロドゥーブ (Стародуб) にいるとされていることから、このときもスタロドゥーブにいて、そこからドニエプル川を使ってキエフに到達したのだろう。

この〈転向〉の理由について、ソロヴィヨフは、「イジャスラフ [C35] は、ユーリイがかれからドレゴヴィチの地を取り上げてスヴァトスラフ [C43] に与えたことについて、この時まで不満を抱いており、ユーリイに反発した」結果だった、と解釈している [Соловьев 1988: С. 458]。このユーリイ及びスヴァトスラフ [C43] の措置については、本稿注7を参照のこと。

206) このゴロドク (Городок) は、オステル川河口の「ゴロドク」ではなく、キエフの丘から北東に7kmほどしか離れていない、ドニエプル川対岸チェルトイ川 (Чертория) のほりにあった城砦の名称。「ゴロデツ・ペソチニイ」(Городец-Песочный) とも呼ばれている。文字どおりは「砂州に築かれた城砦」を意味している。

207) 1151年4月23日に相当する。ゲオルギオスは軍人聖人であり、目前の戦いの戦勝祈願をしたことになる。

208) 「ロドゥーニヤ」(Родунія) は、ドニエプルの左岸の、キエフの丘から北東に10kmほどしか離れていない砂州の名称。「ゴロデツ・ペソチニイ」(Городец-Песочный) に隣接していた。『イパーチ年代記』の1111年の項で「ラドスイニ」(Радосынь) と呼ばれている場所と同じで、公の館があった。

209) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ユーリイはオレーグ一族〔の二人〕とウラジーミル・ダヴィドヴィチ、ポロヴェツ人等とともにキエフに来ると、キエフの対岸の洲に (по лугови) 幕営を張った」とある。この「洲」が上注の「ロドゥーニヤ」に対応していることは明らかである。

ナ川の河口までにわたっていた<sup>210)</sup>。〔イジャスラフ軍〕がキエフから小舟で出撃して戦う者もあれば、陣営から出撃したする者もあり、こうして激しく戦った。

かれら〔ユーリーの陣営〕は、対岸からキエフに達することができなかった。なぜなら、イジャスラフ [D112:I] は船を巧みに操ったからである。すなわち、船には漕ぎ手が見えなかった。櫂だけは見えるが、人間は見えないのである。船は板で覆われ、甲冑を身に付けた戦士たちが船上に立って、【424】弓を射ていた。〔船には〕舵取が二人おり、一人は船首に、もう一人は船尾にいた。〔船は〕方向転換をせずに、望む場所へと行くことができた。

そこで、ユーリー [D17] は、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]、ポロヴェツ人等と協議をして、〔その場所から〕下流にあるヴィテチェフ<sup>211)</sup> (Витчевь) の浅瀬まで行こうとした。しかし、かれらはキエフの傍らを〔船で〕通過して行くことは〔阻止されて〕できなかった。

そこで、船団をルベイスコエ<sup>212)</sup> (Лубѣиское озеро) 湖へと進め、そこから岸にそって船を運搬して、ゾロトチャ<sup>213)</sup> (Золотчя) 川に船を浮かべた。こうして、かれら〔ユーリー陣営〕の船は、ゾロトチャ川を通過してドニエプル川へと入った。

ユーリー [D17] を〔助けに来た〕ポロヴェツ人<sup>214)</sup> は洲〔川岸〕を進軍していた。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、その弟のロスチスラフ [D116:J] および、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、さらに自分の弟ウラジーミル<sup>215)</sup> [D115]、グロドノの公〔ボリス [F111]〕、自らの従士たち、キエフ人、黒頭巾族とともに、評議を行った。そして、ドニエプル川のこちら側<sup>216)</sup> の丘づたいに進軍を始めた。また、かれの船団はドニエプル川に進めた。

210) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「イジャスラフは(…)ドニエプル川の渡渉をゆるさず、両軍は船に乗って、互いに戦った」と書かれている。

211) 「ヴィテチェフ」(Витчевь) はキエフの丘から南東方向に 28km ほど離れたドニエプル川の浅瀬(渡し場)の名で、現在の「プロツィウ村」(Проців) 付近に位置していた。

212) 「ルベイスコエ湖」(Лубѣиское озеро) は、フレブニコフ写本では、「ドゥレブスコエ」(Дулѣбское)、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ドロブスコエ」(Долобьское) と表記されている。キエフの丘から南東方向の対岸(左岸)にある小さな湖。現在の「ドロブスケ湖」(Долобське озеро) に相当する。

213) 「ゾロトチャ」(Золотчя) 川は、ドロブスコエ湖付近から、ドニエプル川に並行して左岸を流れている小川の名称。

214) この部分の原文は, половци же Гюргеви だが、『ラヴレンチイ年代記』では полци же Гюргеви で、「ユーリーの部隊は」という意味になる。どちらが当初の読みか定めがたいが、内容から判断して『イパーチイ年代記』の読みを採用した。

215) イパーチイ写本では「ヤロスラフと」(съ Ярославомъ) となっているが、明らかな間違い。ポゴージン写本の読みにしたがって「ウラジーミル」に修正した。

216) キエフの丘の側、右岸に相当する。

かれらはヴィテチェフのミロスラフスコエ村<sup>217)</sup>(Мирославское село)で、〔敵と〕向かい合っ  
て陣を構えた。布陣したまま戦った。浅瀬の周辺で船に乗って会戦したのである。一方が他方  
を、他方が一方を捕まえながら、そこで向かい合ったまま布陣していた。

イジャスラフ [D112:I] は、相手が渡渉することを許さなかった。〔それゆえに〕一方が他方  
の側に、**[425]** 他方が一方の側に〔到達することは〕出来なかった。

ユーリイ [D17] は、自分の息子たちと協議を行い、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、  
スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] そして  
ポロヴェツ人たちを呼び寄せると、次のように言った。「兄弟たちよ、見よ、われらはここに  
陣を張っている。ここにいることに何の意味があるか。それより、かれら〔敵方〕からザルー  
ブ<sup>218)</sup>の浅瀬(бродъ Зарубьскыи)を占拠しようではないか。そして、向こう側に渡るのだ。こ  
れに全員が同意した。

ユーリイ [D17] は、自分の息子<sup>219)</sup>をポロヴェツ人とともに〔ザループへと〕派遣した。他方、  
ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の二人は、スヴァ  
トスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を派遣した。そして、自分たちは、そこに陣を構え  
たまま、部隊に戦闘準備をさせていた。かれらは自分たちの船を、自分たちの側の岸の砂州に  
並べて整備を始めた。こうして、自分たちの軍船をすべて岸の砂州に整備して並べると、自分  
たちは岸に沿って出発した。

ユーリイの息子、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と原野のポロヴェツ人た  
ちは、ザループの浅瀬に到着した。〔ドニエプル川〕のこちら側では、シヴァルン<sup>220)</sup>(Шварно)  
が警備兵たちとともにいた。ドニエプル川を〔スヴァトスラフ [C411:G] 等が〕渡渉しないか  
と見張っていたのである。ポロヴェツ人たちは、イジャスラフ [D112:I] の守備兵が少ないのを

---

217) 「ミロスラフスコエ村」(Мирославское село)は、ヴィテチェフの対岸(ドニエプル川右岸)に位  
置していた村の名称。

218) 「ザループ」(Заруб)は、ドニエプル川をはさんでベレヤスラヴリの対岸(右岸)にある浅瀬の渡河地点。  
近くのパレヤスラヴリは、支配公のロスチスラフ [D171] が死去したばかり(1151年4月6日)だが、  
まだユーリイ一族の支配下にあり、ザループで渡渉すれば戦力を集めやすかったのだろう。この地名は  
1146年記事にもあらわれている。[イパーチイ年代記(2):341頁,注328]参照。

219) この息子は単数形になっているが、誰であるかは判明しない。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、  
そもそも「ユーリイの息子」もザループに派遣されたということは書かれていない。

220) 「シヴァルン」(Шварн)は、イジャスラフ [D112:I] 軍に従軍していたキエフの軍司令官。かれは  
1146年の記事にも名が見える。その時は、イジャスラフ [D112:I] は、コラチェフに逃げたスヴァトス  
ラフ [C43] を追うために、このシヴァルンをイジャスラフ [C35] とともに派遣している。シヴァルンは  
このときも、イジャスラフ [D112:I] に仕えていたことが分かる。[イパーチイ年代記(3):333頁,注  
30]参照。

見て、かれらに向かって盾で防御しながら馬で渡渉を始めた。かれら〔ポロヴェツ人〕は戦いに備えて、槍を手にして甲冑を身につけていた。こうして、ドニエプル川は多くの兵で覆われ、ルーシ人たち<sup>221)</sup>は小舟で川を横断し始めた。

シヴァルンはこれを見ると、走り出して、イジャスラフ [D112:I]のもとに〔自ら〕駆けつけた。そのとき〔イジャスラフは〕自分の息子のムスチスラフ [I1]をハンガリーへと派遣していたからである。【426】それゆえに、浅瀬の防御は堅固ではなかった。なぜなら、そこに公は不在で、貴族〔シヴァルン〕の言うことは、皆が聴き従うわけではなかったのである。

ユーライ [D17]の息子たちと二人のスヴァトスラフ<sup>222)</sup>は、ポロヴェツ人とともにドニエプル川を渡渉した。そして、ユーライ [D17]に使者を遣って、こう言った。「この浅瀬に来たれ。われらはすでにドニエプル川を渡った。イジャスラフ [D112:I]が、われらに打撃を与えることはない」。

ユーライ [D17]はウラジーミル [C34]とともに<sup>223)</sup>ザループの浅瀬までやって来て、ドニエプル川を渡渉した。

その時、ヴァチェスラフ [D16]とイジャスラフ [D112:I]、かれの弟ロスチスラフ [D116:J]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、ロスチスラフ [D116:J]の兄弟ウラジーミル [D115]、グロドノの公〔ボリス [F111]〕等は、みなイヴァン<sup>224)</sup>(Иван)近郊に布陣していた。そこへ、〔ザループから〕報告がもたらされた。そこで、かれらはキエフへと引き返すことにした。

ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J]は、自分の兄弟たちを招集して、協議を始めた<sup>225)</sup>。イジャスラフ [D112:I]とその弟ロスチスラフ [D116:J]は、かれら〔敵〕と戦うことを常に望んでいた。他方、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [C35]、ロスチスラフ [D116:J]の従士たちは、これらの公のたちが〔戦う〕ことを押しとどめようとし

221) ここで「ルーシ人」と呼んでいるのは、ユーライやその息子の配下の兵のことで、「ポロヴェツ人」との対比で、そのように呼んでいる。

222) これまでの文脈から言うと、この「二人」は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]ということになるが、上の記述では、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]はザループの浅瀬に先行して派遣されておらず、記述に整合性がない。ただし、『ラヴレンチイ年代記』では、二人のスヴァトスラフがザループに向かったことになっているので、こちらの可能性が高い。

223) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、ここに「子供たちと一緒に」(с дѣтми)という文言が加わっている。

224) キエフ近郊に「イヴァン」(Иван)という地名はなく、ドニエプル川右岸にある現在の「ルジシチウ」(Ржищів)近くの高地の名と推定されている。その場合、ザループ(Заруб)からだと西方向へ25kmほど離れている。[Древнерусские летописи, 1936: С. 355, прим. 118]

225) この一節は、イヴァン(Иван)で行われた作戦会議について語っている。



ていた。キエフ人もそうだった。とりわけ、黒頭巾族はその〔戦う〕ことを押しとどめて、次のように言った。

「公よ、あなたは<sup>226)</sup>、かれら〔敵〕へ向かって馬で進軍することは出来ません。なぜなら、われらの兵士たちは、みなが馬に乗っているわけではないからです。もし、あなたがかれら〔敵〕に向かって馬で進軍すれば、かれ〔ユーリイ [D17]〕は、あなたよりも早くロシ川に向けて歩兵を進めることでしょう。そうすると、あなたは、自分の歩兵部隊を後方に残したまま、かれ〔ユーリイ〕の後から、軍を進めることになってしまいます。公よ、われらは、あなたたち〔諸公〕に進言します。どうか、そのようなことはしないで下さい。あなたたちは自分のキエフに馬で行って下さい。【427】そして、われらには弟のウラジーミル [D115] をつけてください。自分たちの幕舎のところ<sup>227)</sup>に行くために。わたしたちは、自分たちの幕舎、自分たちの妻、自分たちの子供、自分たちの馬群など、すべての自分たちのものを連れて行きたいのです。それから、われらはキエフへと行きます<sup>228)</sup>。あなたたち〔諸公と従士たち〕は、〔馬でなら〕夕方にはキエフに到着するでしょう<sup>229)</sup>。われわれも〔後からキエフに〕行くでしょう」。

「われらは<sup>230)</sup>、そなたたちの父であるヴァチエスラフ [D16] のため、あなた〔イジャスラフ〕のため、あなたの弟ロスチスラフ [D116:J]、すべての〔あなたの〕兄弟たちのために自分の命を賭けたいのです。われらは好んで、あなたがたの名誉を回復いたしましょう。さもなければ、あなたがたともに、ここで死ぬことを望みます。ユーリイ [D17] は望みません」。

ヴァチエスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、自分たちの従士たち、キエフ人、黒頭巾族の言葉を聞いた。そして、自分の弟のウラジーミル [D115] を、トルク人、

---

226) 諸公の指揮を執っているイジャスラフ [D112:I] に向かって語っていると考えるべきだろう。

227) ロシ川の沿岸地帯を指している。この一帯では、黒頭巾族が部族集団ごとに「幕舎」(вѣжа) (天幕と馬車を組み合わせた移動住居) で集団生活を営んでいた。

228) ここまでのところで述べられている黒頭巾族の進言の内容は次のように要約できる。かりに、イジャスラフなど諸公の従士だけからなる少数の騎馬部隊だけで、渡渉してザループに着いたユーリイとポロヴェツ人の軍勢を迎え撃とうとしても、ユーリイ側は騎兵・歩兵ともども先に、ロシ川上流域に達して、沿岸地帯にある黒頭巾族たちの城市や幕舎を襲撃・掠奪し、食料や馬匹を確保してしまうだろう。それならば、自分たち黒頭巾族は、ウラジーミルとともに、ロシ川の自分たちの拠点に戻って、一切の人員、馬匹、家財をキエフに引き上げてしまう方が適策である。この進言は、あとで述べられるように、ユーリイの軍勢をキエフに引きつけて、万全の態勢を整えた上で迎え撃つという作戦にもつながっている。

229) イヴァンからキエフまでは、直線距離で北北西に約 70km あり、徒歩なら一日行程以上の距離だが、ここでは、諸公と従士団が、急いで馬でキエフに戻る事が想定されている。

230) ここからの一節は内容から判断して、黒頭巾族ではなく、キエフ人の代表の言葉として理解した。

コウイ人<sup>231)</sup>、ベレンディ人、ベチェネグ人と一緒に、〔ロシ川のかれらの〕幕舎のところに派遣した。そして、自分たちはトレポリ<sup>232)</sup> (Треполь) に向かって出発した。トレポリに到着して、ここで宿営を張った。

翌朝、陽が昇ったとき、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、トレポリを出発して、ボロク<sup>233)</sup> (Борок) を通過してキエフへと向かった。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、進んで行って、城内には入らずに、かれら二人は、金門の前の窪地<sup>234)</sup> に天幕を張った。他方、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、金門とユダヤ門のあいだのボリスラフの館<sup>235)</sup> (Бориславль двор) の対面に陣を張った。ロスチスラフ [D116:J] は自分の息子ロマン [J1] とともに、ユダヤ門の前に陣を張った。かれらと一緒に多くの者たちがいた。また、グロドノのボリス [F111] は、リヤフ門に〔陣を張った〕。キエフ人も、自ら全軍を動員して、ある者は騎馬兵として、ある者は歩兵として、諸公の〔陣営〕に混じって、やはり陣を張った。

右手<sup>236)</sup> には、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] 〔の陣〕からイジャスラフ [C35] とロスチスラフ [D116:J] 〔の陣〕まで、さらにロスチスラフ [D116:J] 〔の陣〕からオレーグの墓<sup>237)</sup> まで、途切れることなく〔陣が構えられていた〕。

231) 「コウイ人」(коуи) は、トルクやベレンディに近縁のチュルク系民族で、この箇所が年代記では初出になる。この部族集団は、『イーゴリ軍記』で取りあげられた 1185 年のノヴゴロド・セヴェルスキイ公イーゴリ・スヴァトスラヴィチの対ポロヴェツ遠征にも、チェルニゴフから送られた援軍として登場している。

232) 「トレポリ」(Треполь) は、ドニエプル川右岸支流のストウグナ川河口近くの城砦で、キエフの南南東 50km ほどに位置している。イヴァンからだど、ドニエプル川右岸の河岸沿いに 30km ほど南西に行ったところにある。[イパーチイ年代記(2): 311 頁, 注 143] も参照。

233) 「ボロク」(Борок) は、トレポリからキエフまでのドニエプル右岸の河岸の「松林」(бор) の一帯を指している。ここには、両地点を結ぶ街道があった。

234) 「窪地に」は、原文では у язины となっているが、そのような地名は確認できないため、у язины (窪地に) の誤記と解釈した。[Літопис руський, 1989: С. 243, прим. 12]

235) 『イパーチイ年代記』の 1152 年の記事に、イジャスラフ [D112:I] が配下の貴族ピョートル・ボリスラヴィチ (Петр Бориславич) を使者としてウラジミルコ [A121] のもとに派遣したと記されている。「ボリスラフの館」はこの貴族の一族(父親)がキエフ城内に所有していた屋敷だったのであろう。この館は、キエフのヤロスラフ街区の城壁に沿う位置にあり、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、その「対面」、すなわち城壁を隔てた外側に布陣したことになる。

236) この「右手」(поправу)、「左手」(полъву) の言い方は、キエフの丘を横断する中心街路(金門からヤロスラフ街区を横断してソフィア門に至り、さらにウラジミル街区を横断してポドリスキエ(下町)門からポリチュエフの坂を下る)を基準にして、西側を「右手」、東側(ドニエプル川側)を「左手」としている。

237) 「オレーグの墓」(Ольгова могила) はキエフの丘の北西に隣接するシチェコヴィツァの丘(Щековица)にあったと推定されている。[イパーチイ年代記(2): 343 頁, 注 345] を参照。

左手には、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] [の陣] から **[428]** リャフ門まで [陣が構えられていた]。このようにして、[キエフの] 城市全体を取り囲んで、非常に多数の [兵がいた]。

そのとき、ウラジーミル [D115] が、すべての黒頭巾族とともにやって来た。かれらは、幕舎、馬群、自分たちの家畜ごとやって来ており、おびただしい数だった。かれら [黒頭巾族] は戦士であるか、民間人であるかを問わず、大いなる悪行をなした。すなわち、修道院を荒らしたり、村々を焼いたり、柵を破壊したのである。

ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、ウラジーミル [D115] に命じて、ベレンディ人を連れて、幕舎や馬群とともに、オレーグの墓の所へと行かせた。こうして、かれらは、オレーグの墓のところから、聖ヨハネ [修道院] の柵のところまでの林の中に、びっしりと幕営を張った。その先のシチェコヴィツァ (Щековица) までのところにも。

また、コウイ人、トルク人、パチェネグ人たちは、そこに向かって、金門から柵づたいにリャフ門まで陣を張った。そこからまた、クロフ<sup>238)</sup> (Клов), ベレストヴォ<sup>239)</sup> (Берестово), ウゴル門<sup>240)</sup>, さらにドニエプル川までも [陣を張った]。

このようにして、諸公と従士たちは自分たちのあいだで軍の態勢を整え、黒頭巾族もキエフ人も [そのようにした]。すなわち、かれら [敵] に対して、戦うために部隊を集中して対抗することはせずに、自分たちのところに引き入れて、かれら [敵] と戦おうとしたのである。

そして、イジャスラフ [D112:I] は言った。「どうか、われらに神の助けがありますように。われらは、かれら [敵を] 撃ち払おうではないか。かれら [敵たち] は羽根を持っていないのに、ドニエプル川を飛び越えて、[こちらに] 着地した。しかし、もし、かれらがわれらの前から撤退することになれば、その時は、神はわれらとかれらのことを定めたということなのだ」。

ヴァチェスラフ [D16] は、イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] に言った。「兄弟たちよ、見よ、われらはすでに武装して集まっている。確かにユーリイ [D17] はわしの兄弟である。しかし、わしより年少の弟なのだ。わしは年長なのだ。わしはかれに使者を派遣して、自分が年長であることの確認を求めようと思う。これについては、神の前でわれらは裁かれるであろう。神は正義とはなにかを見通しておられるのだから」。

イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は言った。「父よ、そのようになして下さい。

---

238) 「クロフ」(Клов) は、キエフの森の南に接する一帯の地名で、現在もその名を残しており、ペチェルスキイ区の一隅である。

239) 「ベレストヴォ」(Берестово) は、クロフからさらに南にある村落。そのさらに南隣に洞窟修道院がある。

240) 「ウゴル門」(Угорские ворота) は、キエフの丘から南東へ2kmほどの、リャフ門へ通じる街道に設けられた門のこと。

それが正しいことです」。

ヴァチェスラフ [D16] は、自分の家臣の一人に「わが兄弟のユーリイ [D17] のところに行け。

**[429]** わが名において、兄弟〔ユーリイ〕に接吻〔の挨拶〕をせよ」と言った。

〔そして、ヴァチェスラフはイジャスラフとロスチスラフに向かって言った〕「そなたたち、兄弟にして息子であるイジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] よ、聞くがよい。そなたたちの前で、わしはこの者を〔使者としてユーリイに〕派遣することにする」。

〔そして、ヴァチェスラフは家臣に続けて言った〕

「わが弟〔ユーリイ [D17]〕に、こう言明せよ。『弟よ、わしはそなたに多くのことを言った。そして、イジャスラフ [D112:I] にも〔言った〕。そなたたち二人に、キリスト教徒の血を流さないよう、ルーシの地を滅ぼさないようにと言ったのだ。わしは、お前たち二人に、このように禁じたにもかかわらず、これを守らず、わしを繰り返し侮辱した。一回目も二回目も。これによって、そなたたち二人は、わしの名誉を損なった<sup>241)</sup>。わしは部隊を持っている、軍勢を持っている。これは、神がわしに与えたものである。しかし、わしはルーシの地のため、キリスト教徒のために、これらのことをすべて敢えて言うことはしなかった。

しかしこのことは、以前からわしはおまえたち二人に言ってきたことなのだ。イジャスラフ [D112:I] がイーゴリ [C42] と戦った時、かれ〔イジャスラフ〕は〈自分のためにキエフを求めているではありません。わが父にして、年上の兄弟ヴァチェスラフのために、これ〔キエフ〕を求めたのです〉と言った。かれ〔イジャスラフ〕はこう言って戦いに出た。そして、神はかれ〔イジャスラフ〕をお助けになった。ところが、かれ〔イジャスラフ〕はキエフを自分のものにしただけでなく、さらにトゥーロフとピンスクをわしから取り上げ<sup>242)</sup>、そのことによって、かのイジャスラフ [D112:I] はわしに侮辱を加えた。

また、兄弟よ、そなた〔ユーリイ〕は、ペレヤスラヴリで、イジャスラフ [D112:I] と会戦した。そのとき、そなたはこう言ったではないか。〈わたしは自分のためにキエフを求めたのではない。わたしには年長の兄弟ヴァチェスラフ [D16] がおり、わたしの父のような方である。その方のために〔キエフを〕求めたのだ〉と。そして、神はそなたを助けた。ところが、そなたはキエフを自らのものとし、さらには、ペレソプニツァとドロゴブージュをわしから取り上げた。こうして、そなたはわしに侮辱を加えた。そなたが、わしに与えたのはヴィシエゴロド **[430]** ひ

241) 「名誉を損なう」(положити бесчестье) とは、公として本来持つべき権利や示されるべき名誉(総じて честь と呼ぶ)を失わせること。すぐ前の「繰り返し侮辱する」(переобидѣти) が具体的な掠奪や加害・権利侵害の行為を指すのに対して、こちらは、公の名誉・正義観念にかかわる表現である。

242) これについては、1146年の項を参照([イバーチイ年代記(2): 348頁, 注373]参照)。また、上注241の部分でも、ヴァチェスラフはこれについて触れている。

とつだった<sup>243)</sup>。

わしは、それらすべてを正す〔ために戦う〕ことはしなかった。それは、ルーシの地のため、キリスト教徒のためだった。さらに、わしはお前たち二人の〔あいだの戦いを〕押しとどめようとしたが、お前たちはわしの言うことを聞かなかった。このようにして、お前たち二人は、わたしに対して、神に誓ったことを遵守しなかったのだ。

そして、そなたなどはわしに、〈自分は年少の者に拝礼しない〉と言ったのだ。見よ、イジャスラフ [D112:I] も、二度にわたって自分の言葉〔約束〕を破ったが、見よ、今はキエフを獲得しているではないか。そして、かれはわしに拝礼し、わしに名誉を加えた。そして、わしをキエフの公座につけ、わしを父と呼び、わしはかれを息子と呼んでいる。

そなたは〈自分は年少者に拝礼しない〉と言っているが、見よ、わしはそなたより年長である。それも、わずかな〔年の差〕ではなく、大きな〔年の差が〕ある。そなたが、生まれたとき、わしにはすでに髭が生えていたのだぞ<sup>244)</sup>。もし、それでもなお、わしが年長であることを蔑ろにして、かつてのように、戦いを挑むのであれば、神はすべてを見そなわすであろう<sup>245)</sup>』。

このように言って、〔ヴァチェスラフは〕使者を〔ユーリイのもとへと〕派遣した。

---

243) この、イジャスラフがヴァチェスラフに加えたとする「侮辱」については、前注 66 を参照。

244) ユーリイ [D17] の生年は、正確には分かっていないが、この箇所から、1083 年生まれであるヴァチェスラフが成人するころに生まれたことが推察される。かれはハロルド二世の娘ギータの死後に結婚した後妻（ビザンツの貴族の娘と伝えられる）との子である。

245) この、神判としての戦争を宣言する表現については、[イパーチイ年代記(2): 320 頁, 注 192] を参照。

## 参考文献

- Войтович 2006 — Войтович Леонтий, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Зайцев 2009 — Зайцев А. К. Черниговское княжество X - XIII в.: избранные труды. М., 2009.
- Древнерусские летописи, 1936 — Древнерусские летописи. / Перевод и комм. В. Панова. Ред. В. Лебедева. Статьи В. Лебедева и В. Панова. М.;Л., 1936. (Серия «Рус. мемуары, дневники, письма и материалы»).
- Карамзин 1991 — Карамзин Н. М. История государства Российского в 12-ти томах. Т. II - III. М., 1991.
- Каргер 1958 — Каргер М. К. Древний Киев : очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 1. М.:Л. 1958 .
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- ПСРЛ Т.2, 1908 — Полное собрание русских летописей: Т. II, Ипатьевская летопись Издание 2-е. СПб., 1908.
- РУИНА.RU: Городища Древней Руси (<http://ruina.ru/>)
- Рыбаков 1951 — Схематическая карта населенных пунктов домонгольской Руси сост. Б. А. Рыбаков // История культуры Древней Руси. Материальная культура. М.; Л., 1951.
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.
- Татищев Т. III, 1995 — Татищев В. Н. Собрание сочинений Тома II и III: История российская. Ч. II. М., 1995.
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I-VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- Янин 2013 — Очерки истории средневекового Новгорода. (изд. втор. перераб. и допол.) М., 2013.
- Rusian genealogy — Rusian genealogy: Maintained by: Christian Raffensperger and David J. Birnbaum (<http://genealogy.obdurodon.org/about.php>)

- イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233～268頁
- イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(2) — 『キエフ年代記集成』(1118～1146年)」『富山大学人文学部紀要』(62号, 2015年2月) 287～353頁
- イパーチイ年代記(3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(3) — 『キエフ年代記集成』(1146～1149年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2015年8月)
- スズダリ年代記訳注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」『古代ロシア研究』22号, 2010年。13～37頁。
- オストロゴルスキイ 2001 — ゲオルグ・オストロゴルスキイ 『ビザンツ帝国史』, 恒文社, 2001年。
- 尚樹 1999 — 尚樹敬太郎 『ビザンツ帝国史』 東海大出版社, 1999年。
- ノヴゴロド第一年代記 [I] — 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳・注」『古代ロシア研究』12号, 1978年。
- ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳 『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤田英実香は京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程に在籍している。